

始



364
212

11~107

364-212



107

子



## 序

昔芭蕉に辭世の句を問ふた時に、平常言ひ捨てた句が皆辭世である。特に辭世の句といふべきものは無いといつたといふ話がある。面白いと思ふ。

若し私が明日にでも死んだなら、此冊子に蒐めた作品を以て、私の辭世の文章と言つてよからうと自問して見る。よさうな氣持がする。ほかのことはどうでもいゝ。

唯辭世の文章といつても差支ないだけの心持がする。

彼の柵を壊したり繕つたりしてゐた停車場の裏側の細道は、軌道が複線になつた爲に遂に形を留めなくなつてしまつた。その代り停車場は建ち變つて、裏側からも這入れるやうになつて、彼の細道と略併行したところに大きな新道が作られて、そこは車でも自動車でも自由に通ふやうになつた。停車場を昇降する三分の一以上の人は此道を通つてゐる。其道傍にはもう煙草店も出來た。宿屋も建ちつゝある。料理屋らしい

ものも出来かゝつてゐる。砂利を敷きつめたその道は車の轆の食ひ込むやうなことはない。坦々たる大道になりつゝある。これは「道」の後日譚である。

大正六年六月二十一日、梅雨の黄昏、ホトトギス發行所にて

盧子

目次

道……………三

落葉降る下にて……………一三

内地の海邊より……………四三

兄……………六一

一 日(東京)……………一三七

一 日(下關)……………一八五

一 日(鎌倉)……………二九九

道

高濱  
虛子

# 道

東京を離れることが餘り遠くない此の驛を昇降する人には私のやうに東京を日歸りにする人も少くはない。横濱に通勤する人は其よりも多い。

其等の人は大方便の禮をして自由に改札口を出入するのである。

此前途の驛長は此地に別荘住居をしてゐる顯官だとか豪商だとかいふものにはにこ／＼と下ら近づいて世間話などをした。所謂元老の一人の顔もよく此のプラットホームに見えた。驛長はいつも其前に立つて腰をかゝめて舉手の禮をした。

朝七時から八時頃の間に發車する汽車には慌てゝ此驛に駈附ける人も多かつた。向うの方に一かたまり此方の方に一かたまりといふ風に在る別荘からは洋服姿の人も羽織袴の人も出て來た。其等の人が田圃路のぬかるみを穿物をよこさぬやうに難澁して

歩く姿が少し高みになつてゐる其プラットホームからは手に取るやうに見えた。風に帽子を飛ばされて慌て、頭を抑へた友人の姿を遠望して手を叩いて笑つた二人連の人も其處にあつた。

其等の人は發車間際になつてぞろ／＼と驛の四周から集まつて來るのであつた。

改札口は唯一つであつたが、其等の人の此プラットホームに流れ込んで來る路は三所あつた。其うち二つは驛の裏通りについた路で普通に人の通行の出來ないところをいつの間にか通路にしてゐた。

まだ亡くなつて間も無い豪商の朝田氏などは其毎日の横濱通ひにいつも病軀を車に載せて此裏路の一つに引き込ませてゐた。

固より其等裏道黨は大方定期券をポケットにしてゐたが、中にはプラットホームに這入つてから赤帽に切符を買はせて改札口で驛夫に鉄を入れさせる婦人などもあつた。

「お釣錢はいらないのよ。」と首にラッコの皮を巻いた其婦人は鷹揚に、切符を受取る時過分の釣錢を其儘赤帽の手に握らせた。赤帽は右手に其赤い帽子を取つて其を右の方に突出した儘慇懃に上半身を屈めて禮をした。レールを隔て、苦々しげに此容子を見てゐた改札夫は折節駈附けた三四人の人に切符を突き附けられて腹立たしげに其に鉄を入れた。

「改札口の方から廻つたら間に合はなかつたかも知れないのね。」と轟然と這入つて來た汽車とカラ／＼と走るやうに踏みならすブリツチの下駄の音とを聞き乍ら、其婦人は連れの人を顧みた。折節又ステッキを脇ばさみ乍ら其裏道を駈けて來た一人の紳士はまだ先きの下駄の音がブリツチを降りきらぬ間に二等室に飛び込んだ。

斯くの如く此裏道は乗客の多くに取つて此上ない便宜な道であつた。

けれども此道がこんなに、殆ど公然の通路と見なされる迄には屢々柵が結ばれて何度といふ事なく通行禁止の札が建てられたものである。私の如きも矢張りいつもの通

り其裏道が通行出来るものと心得て、凡そ時間を計つて出掛けると、意外にも柵が結ばれて俄に通行禁止になつてゐるので其爲め汽車に乗り遅れた事などもあつた。

古い枕木で拵へた其柵は暫くの間儼然と往來を遮つて、其處を通る人は絶無になるのであつた。いつも近道を取つてゐた人も改札口の方へ廻つた。病軀の朝田氏も腰を屈めて改札口から這入つてブリツヂを渡つて行つた。

が、其は永くは續かなかつた。柵はいつの間にか壊されてゐた。初め柵の結ばれてゐる間不平らしい顔をし乍らも黙りこくつて改札口から出這入してゐた人々が又いつの間にか其破れた柵を澄ました顔をしてくよつてゐた。

朝田氏の車は間も無く又た其裏道を通るやうになつた。

驛長は凡て其等の出来事を知らぬかのやうに、柵の儼存してゐる間も、又其の破壊されて後も、同じやうに顯官、富豪の前に立つては愛嬌を振り蒔いてゐた。

私が此地に移住して來てからももう足掛四年になるが、其間に同じやうな事が何度

繰り返へされたであらう。

「又柵が結はれたな。今度はいつ頃壊されるだらう。」私はさう思つて其都度新らしく結はれた柵を眺めるのであつた。

「おやもう壊されたのか。」私は忽ち又新たに壊された柵を見乍ら微笑を禁じ得なかつた。もと／＼其は往來でないところを人が踏みかためて自然に通路にしたのであるから、人の通らぬ日数が重なると夏草などは瞬く間に其處に生ひ茂るのであつたが、其は四五日で踏み枯らされてすぐ又もとの往來になつた。

此事に就いて斯んな事を話し合ひながら通る二人の人があつた。

「道といふものは自然ですね。」

「さうですよ、道といふものは自然ですよ。」

二人は同じやうなことを話し合つてゐた。けれども此二人の職業も性格も違つてゐた。一人は柵さへ破れれば直ぐ近道を取る人であつた。他の一人はどういふ事があら



うとも必ず改札口から出這入する人であつた。

前の驛長は土地の宴會に呼ばれると皿廻しなどをして一座の興を添へた。俱樂部で活動寫眞のある時も肝煎りの一人であつた。ゆく／＼新道路がどこそこにつくから其沿道の地面を買つてはどうかと或人に勧めたりなどもした。

其驛長が他に轉任して今の驛長になつてから、此驛の空氣は一變した。今度の驛長は何人の前に立つても辭儀をしなかつた。如何なる大官富豪の前でも頬の落窪んだ青白い顔に威儀を造つてだまりこくつてゐた。例の元老の一人も稍々不自由な足を引ずり乍らコツ／＼とブラットホームを散歩してゐたが、知らぬ顔をしてゐる驛長の前を通り越して腹立たしさうに靴の踵で大地を厭つた。

久しく打ちやり放しになつてゐた裏道の柵が間もなく新たに結ばれた。改札口でも舉手をした許りで通らうとする定連を一々呼びとめて定期券を取りしらべた。

「今度の驛長は馬鹿にやかましいな。」

そんな不平がぶつ／＼と聞こえた。けれども前の驛長程に慣れ親しみ難いといふ事が容易に反則者を出さしめぬ原因になつた。皆苦々しい顔をして改札口から這入つた。中には毎日のやうに定期券を示して這入る人もあつた。

或日の事驛長自身が改札をしてゐた。

「驛夫に任して置くのが不安心で到頭自分で改札するのか。」と定連に一種の壓迫を感じしめたが、併し間もなく、靴ばきのまゝ屋根に上つて煤竹のやうなものを持つてゐる驛夫を見るに及んで其理由が判然した。其はストーヴの煙突掃除をするのに、別に掃除屋を傭はず、驛夫に其をさせる爲めに驛長自身で改札に廻つたのであつた。二人の驛夫は竹を煙突に突込んで散亂する煤埃りに顔をそむけ乍ら騒いでゐた。

或時顎鬚を生やした一人の洋服を着た人が、一人ブラットホームを散歩してゐたが、やがて其散歩の足を例の裏道の方に延べて、殆ど柵の近處迄行つて又引き返へして來た。丁度其時レールの上に立つてゐた驛長は其人を呼び止めた。

「もし、貴方、其方の道から這入つて来てはいけません。」

驛長の聲は低い沈んだ愛嬌の無い聲であつた。顎鬚の生えてゐる色の赤黒い人は立ちどまつたと思ふと音量の多い鋭い聲をして叱るやうに言つた。

「黙れ！」

怒りが心頭から發したやうに暫く驛長を睨み据ゑてゐた。

「お前は何だ。」怒りに慄へる聲は再び詰責するやうに言つた。

「私は驛長です。」驛長は沈んだ聲でレールの上に立つた儘答へた。

「そんな所にぼんやり立つてをらずに此處迄よつて来い。」顎鬚の人は命令するやうに言つた。驛長はすこゝと其人の前に立つた。

「お前は驛長なのか。」顎鬚の人はチリ／＼と驛長の金線入りの赤い帽子を睨め乍ら、

「驛長なら自分の部下の驛夫がもう改札しつゝあるかどうかといふ位は心得てゐるべき筈だ。僕はお前が此處に赴任して来てから無暗に嚴重な監督をして居る事はよく知

つて居る。悪い事では無いと思ふから、僕は非常な廻り路をして必ず改札口を通過して這入ることに極めて居る。現に唯今も改札口で、これこの通りチャンと回数券に鉄を入れてもらつて這入つて来て居る。お前は先づ其事を聞きたゞしもしないで、行きなり僕を裏道から這入つて来たものと推斷したのはどういふわけか。十分に事を取り調べもせず無禮な事をいふ。」

さう言つて驛長の前に突きつけた二等の回数券には鉄が這入つてゐたので、驛長は青白い顔を一層青白くして帽子を取つて禮をした。

「輕卒な事を申上げて失禮しました。」

「あやまれば宜しい。」顎鬚の人は勝誇つたやうに體を垂直にして再びプラットホームを歩き出した。レールを隔て、向うのプラットホームに此容子を見てゐた少壯の海軍軍人の一團は皆此結果を見て噴き出して笑つた。驛長は少し首を垂れて引返へしたが、其歩調は靜かに落着いてゐた。

今度の柵は容易に壊されさうになかつた。誰も彼も正直に改札口から出遣入りした。さういふ事が殆んど半歳も續いた。彼の柵が儼然と半歳の間も壊はされずにみるといふ事は私が覚えてから初めての事であつた。

「此状態がいつ迄續くであらう。或は永久に續くであらうか。」

私は時々そんな事を考へた。

ところが最近友人を送つて停車場に行く序にふと見ると、其柵は又二三本引き抜かれたやうになつて、人の通れる位に壊されてゐた。私は謎が解けたやうな心持がして思はず立ちどまつて其齒の抜けたやうになつてゐる柵を見入つた。

冬枯の細道は草も生えずに、其破れた柵を透してプラットホームに續いてゐた。

驛長は又直ちに修理に取りかゝるであらう。

其にしても此柵を壊すものは何であらう。(大正三年二月)

## 落葉降る下にて

私は今或温泉に来て居る。此温泉には二十年程前に一度來たことがある。其は或大病をした揚句であつて、其時は醫者から一度見放された位であつたのが幸に快方に向つて、其恢復期を此の温泉で過ごしたのであつた。二十年程前といふとまだ私は二十を澤山越してゐなかつたので、私は早婚ではあつたが、其頃はまだ乳香兒が一人ある位のものであつた。

其頃私はこゝの温泉につかりながら心は歡喜に充ちてゐた。すんでの事で死ぬるのであつたのが命をとりとめた、といふ喜は噓へるにもが無かつた。私は毎日何をするといふ事無く、唯ぼんやりと温泉につかつて、洋々たる春のやうな前途を自分で祝してゐた。家庭には漸く此頃片言交りに喋り出した子供を抱いて若い妻は私の歸る

のを待つてゐたし、其頃私のやりかけて居つた事業も豫想したよりは都合よく運びかけてゐたので、其も此際一發展すべく私の歸京を待つてゐるやうな始末であつた。此際半月や一月歸るのが後れたところで家庭の方も仕事の方もさうたいした不都合があるといふでは無し、其よりも十二分に健康を恢復して、今後素晴らしい活動をせなければならぬといふやうな、何事につけても前途にのみ希望を繋いだ心の張りを持つて悠悠と此の温泉に漬つてゐたことを私は稍々古い昔の事のやうに思ひ出すのである。十年や二十年昔の事でも、恰も昨日の事のやうに思ふといふのが世間の常であるが、私はどういふものだから、其が十年や二十年よりも、もつと古い事のやうに思ふのである。今此宿に来て見ると、矢張り温泉は昔の通りの温泉、庭の大木は昔の通りの大木、裏を流るゝ川は昔の通りの川、周圍を取圍んでゐる山も昔の通りの山、温泉客を此處に運んで來る乗合馬車のラツバの響さへ昔の通りの響である。が、其でゐて、其二十年前の事を思ひ出して見ると、其はもう古いく昔の事のやうに思はれて、何だか違つ

た世の中の出來事のやうな心持さへするのである。隔世の感といふのは大方斯ういふ心持をいふのであらう。

今度來た私は靴に一杯詰め込んで來た仕事の事のみを氣にしてゐるのである。今の私に前途といふやうなものがあるであらうか、考へて見れば無いことも無いやうであるが、其を考へてゐるよりも目の前に迫つて來てゐる仕事の方が強く自分を壓迫して來て、唯其にのみあくせくしてゐるのである。此宿の一間に陣取つて、此處で愈々若干日を過ごすことゝ極めた時も第一其山の形も水の形も餘り眼に入らなかつた。唯私の眼の前には仕事を詰め込んだ靴が聳えてゐる許りであつた。

同じ温泉を浴びながらも私は昔の心持を呼び起こさうとさへ思はなかつた。あの頃唯一人の乳呑兒を抱へてゐた妻も今はもう六人の子持ちである。もう皮膚にも光澤が無くなり髪の毛も薄くなつた中婆さんである。其頃緒につきかけて有望なるものゝ如く思はれてゐた事業はどうであつたか、幾多の波瀾を経た後ち格別目ざましい事も無

しに現在ある通りの状態である。今になつて見るとあの當時若い心を躍らした程のものでは無く、元來事業其ものが平々凡々たる詰ら無い事業であつたことが判るのである。其でゐて私は毎日々々其仕事に逐はれて、其積り／＼滞り／＼した仕事を此の靴の中に詰め込んで此温泉に落延びて來た始末である。温泉に這入るのも餘り運動を缺いて腹が空かぬので仕方無しに、運動代りに這入るのである。出て來るとすぐ日受のいゝ座敷に陣取つて仕事に取りかゝる。流石に山間であるから朝晩は冷えるけれども晝中は暖か過ぎる程暖い。

私の部屋の前には大きな榎の木がある。其が盛に落葉してをるのが明け暮れ眼に入る。風の吹く時などは目覺しい勢で大空から降つて來る。私の部屋の疊の上にもいつもから／＼になつた奴が轉けて居る。

私の部屋は川に臨んでゐて、部屋と川との間に狭い往來があるので、其處を通る人が私の部屋から見下ろされる。——私の部屋は往來より少し高くなつてゐる——或時

見るとも無しに見て居ると別に變つた風體といふでは無いけれども、何となく一目見て忘れることの出來ぬやうな四十四五の神經質らしい男がふと目に留まつた。其日浴場に行つて見るとちやんと此宿の湯風呂の中に首だけ出して漬つてゐた。別に人の顔を見るでも無く、同じ方を見詰めて靜にちつと漬つてゐた。が、忽ち非常な勢ではね上るやうに湯壺から出て、石鹼を頭の先から足の尖迄一度に塗つて、手桶に酌んだ湯を腦天からぶつかける容子などが餘程せつかちのやうに見えた。かと思ふと又湯壺の中に漬つて極めて悠長に手足を延ばしてゐた。稍瘠せ地の皮膚のかさ／＼してゐるのが目に立つて見えた。

其日は其ぎりで物も言はなかつたが二三日して又同じ浴場に出逢つた。少し湯がぬらかつたので熱い元湯を出さうと思つて私は其人に一寸斷つた。

「少し熱い湯を出しますがよろしいでせうか。」

「よろしうございます。」

其男は早口であつた。其から大分熱くなつた湯に漬つた時其男は其かさくした皮膚を眞赤にしてゐた。

「少し熱くし過ぎましたか知らう？」

「いえ、結構です。」

其男は矢張り口数が少なかつた。其日は其限りで物も言はなかつた。

仕事が運びかけたので少し落着きが出来て来た。其處で仕事の合間々に私は此文章を書いて見る氣になつたのである。私は何を書くか判らぬが、唯考へ出した事、見聞した事などを順序も無く書いて見ようと思ふ。

私は十八の年に父を亡くしたのであつたが、其時醫師は何故に此父を殺したのかと唯醫師を怨めしく思つた。父は胃癌であつたのだから如何なる名醫が出て來ても助かる筈は無かつたのであるが、其當時の私は父は死ぬべき人で無かつたのを醫師の不行

届から殺したのだと考へた。理窟では人は死ぬるものだといふ事位百も承知してゐたのであるが、感情上どうしても自分の父が死ぬるものだと考へられなかつた。其時醫師が私の顔色を見て其座を外したのも尤であつた。私は其醫師を撲り殺して遣り度い位に考へたのだもの。血相の變つた青年の顔を見て醫師が恐れを爲したのも尤な次第であつた。其から後私は随分親戚のものや友人の死ぬるのを見た。母が死んだ時には仕事の都合で歸省することが出来なかつて、其死目に逢はなかつた。神田の牛肉屋で友人と一緒に酒を飲んだあと飯を食つてゐる所へ死去の電報が來たので私は飯を吐き出して泣いた。長病であつたので、いつ死ぬるかといふ事は固より豫期されなかつた。しかし折も折、牛肉で酒を飲んだ揚句飯を食つてゐるところへ此報知を得たので私は自分の淺ましさを振り返つて口惜しかつた。私は友人に禮を失することなど忘れてしまつて、自分が主人であり乍ら、自分と一緒に牛肉を食つて酒を飲んだ友人が腹立たしくなつて、碌に友人には物も言はずに自分の家へ歸つて來て獨りで足りるだ

け泣いた。其程ではあつたけれどももう此時は醫師を恨むやうな心持は無くつて、母は早いか遅いか死ななければならなかつたもの、其が死んだのだとすぐあきらめてしまつた。澤山自分に親しいものが死んだ揚句、もう感情上にも自分の骨肉の死も世間の人の死と同様抗むことが出来ぬものと観念したのであつた。ところが其考が、自分の子供の上には又一應後戻りがして、私は殆ど最近に至るまで自分の子供は死ぬるもので無いやうな心持がしてゐた。私の第二女は壯健に生れついたので、生れて間もなく百日咳に取つゝかれ其揚句が肺炎になつたので、一時はもう助からぬものゝやうに醫師は言つてゐた。親戚のものなども、もう私にあきらめた方がよからうなど、言つたが私はどうしても自分の子は死ぬるものではないと思つた。儘かに死なうといふ自信があつた。其で私は自分一人が其子を引受けて夜の目も寝ずに介抱した。醫師は私の氣違ひ染みたのに少しあきれてゐた。けれども其結果其子は助かつた。其から随分長い間病弱の兒であつたが、もう尋常を卒業するのも間も無い昨今の年になつて餘

程強健になつた。其から後に生れた兒も、強健に生れて置きながら兎角風邪がもとで肺炎などになつて、又かゝと思ふ位であつたが、矢張り、自分の子供は死ぬるものか、といふ自信は強烈であつた。さうして又實際皆助かつた。皆相當に強健な兒に育ち行いた。ところが此自信も最近に至つて崩れてしまつた。といふのは私の六番目の子、其は女にすると四番目に當るのであるが、其第四女が、これは他の子供と違つて少し月足らずに生れたらしく、生れ乍ら弱かつた上に又例の肺炎にかゝつて、其結果腦も少し悪くしたらしく、三つになつてまだ足も立たず首も据わらぬ位であつたが、其が到頭梨の花の咲いてゐる時分に死んでしまつた。其前から私は此子供はもう到底助からぬものだと思念してしまつた。其でも初めて肺炎になつた時は、矢張り前の多くの子供と同じやうに是非助ける積りで火鉢を入れて一室をぬくめたり、濕布をしたり、吸入をしたり、あらゆる手段を盡くしたが、其結果腦を悪くしたらしく、肺炎はなほつても低能兒みたやうな風になつてしまつた。其後醫者に聞いて見ると、もう斯る肺

炎の療法は舊式になつてゐるので、矢張り換氣法をよくして、なるべく自然に則る方が、あとの結果がよいやうだと言つた。骨肉も尙ほ死ぬるものだといふ事は父母の死以來一應合點されてゐ乍ら、其が自分の子供の上になると、何の理窟無しに決して死なぬといふ堅い自信を持つてゐたものが此時以來がらりと崩れてしまつたのである。春になつてから肺炎が再發して、呼吸の數が四十になり六十になり八十になり、脈の數が百になり百二十になり百五六十になり、まだ齒も十分に生えてゐなかつた齒ぐきで苦痛の餘り母の手に食ひついた、といふやうな事を聞いた時、私はもう其子の顔を見るに忍びなかつた。其子の介抱は妻に任せつきりにして表から歸つた儘すぐ座敷の机の前に坐つてしまつた。

「相變らず苦しさをうです。少し見てやつて下さい。」と妻は言つた。其には私の冷淡を怨むやうな語氣が見えた。私は机の前を立上つて奥の間に行つて見た。其子は睡つてゐるのであらう、呼吸の度に頭の動くのが見えて、見るからに苦しさをうである。斯る

時小鼻を出来るだけ膨らませて、腫れ塞がった肺臓に一生懸命に空氣を吸込まうとする努力は私の幾度となく他の子供の肺炎の時に實見したところで、其は見えてゐる方が一層苦痛を覚えるのであつた。が、此時は正面に廻つて最早其を見るに忍びなかつた。私は其儘又座敷の机の前に坐つてしまつた。

此態度が妻には不平であつた。其も尤の事であつた。今迄の子供の病氣の時には殆ど妻には關係させない位にして私一人で介抱に當つて來たものであつた。其が此子供に限つて、妻に一任して振り返らうともしないといふ事は随分慘酷な事のやうに解せられたであらう。又慘酷なことかも知れなかつたのである。けれども此時分からの私には、もう死ぬるものを強ひて抱き止めようといふやうなそんな熱は無くなりかけてゐたのである。

「凡てのものゝ眠びて行く姿を見よう。」

私はそんな事を考へてちつと我慢して其子供の死を待受けてゐたのである。



呼吸を引取る朝は大分咳が楽さうで、肺部の腫が減じかけて痰が分解しかけたのだらうと思つた。けれども脈がだん／＼と微弱になつて来て頼み少く思はれた。醫者はチキタリスを用ゐてゐたので、もう其が今日位から利くだらうと言つた。其が切めてもの頼みであつた。子供は此日から私の机の置いてある座敷の方に移された。暫くの間非常に静かに眠つてゐるので私は妻に勤めて二人で表の空気を吸ひに出た。豆の花の咲いてゐる田圃路を一町許り歩いて歸つて見ると、病兒の傍には長女が坐つてゐた。「時々妙な聲を出しますよ。」と長女は氣味悪さうに言つた。成程丁度風が空洞に當つて鳴るやうな不思議な聲を出した。呼吸を引取つたのは其から間も無い事であつた。抱き上げると一層苦しげに體を蕩擻くので此の一兩日は抱かなかつた。其爲め呼吸を引取る時も別に抱き上げようといふ心持が妻にも起らぬらしかつた。私も抱き上げてやれと妻に言はなかつた。三歳の少女は父母にも抱かれずに、風の空洞を吹くやうな聲を残して其儘瞑目してしまつたのである。

葬儀萬端は私一人でした。人に頼んでやつて貰はねばならぬといふ程私の心は取亂してゐなかつたのである。

私は其後度々墓參をした。

凡てのものゝ亡び行く姿、中にも自分の亡び行く姿が鏡に映るやうに此墓表に映つて見えた。「これから自分を中心として自分の世界が徐々として亡びて行く其有様を見て行かう。」私はちつと墓表の前に立つていつもそんな事を考へた。

「何が善か何が悪か。」

「善惡不二」と言つたり「不思議不思議」と言つたりする佛家の言を自分勝手に解釋して其頃の自分の心持にびつたりとはまるやうに思つたのも其頃であつた。「善人すら成佛す、況んや悪人をや」と言つた親鸞上人の言葉が流石に達者の言として染々と受取れたのも其頃であつた。

ちつと考へて見ると私の頭の中には種々葛藤があつた。之を明るみに出して見たら

自分乍ら鼻持ちのならぬやうなものが澤山ありさうに思へた。「さながら成佛の姿なり」と言つた佛家の言をこゝでも思ひ出して、即ち此の善惡混淆、薰蕕同居の現状其まが成佛の姿だと解釋した。頭の中許りで無く、私の世間で遣つてゐる仕事が悪か悪か正か邪か。凡て其等も疑問とせなければならなかつた。私は其をも同じやうな考の下に正とも邪とも善とも悪とも考へやうとはしなかつた。諸法實相といふのはこゝの事だ、唯ありの儘をありの儘として考へるより外は無いと思つた。

月給を貰つて会社の社員になつてゐる以上其会社の規則に背いたら免職されるのは當然の事である。其と同じく社會、國家の一員である以上、其社會、國家の種々の規則に背いた時其制裁を受けるのは是亦當然の事といはねばならぬ。けれども私は私の考へてゐる事遣つてゐる事をすぐ其世の中の規則で律し度いとは思はなかつた。世の中の規則で律しられるのは固より當然の事として恨まないが、自分で其を律して見る氣にはなれなかつたのである。自分は自由に考へよう、自由に遣らう、さうして善け

れば社會的、國家的に榮えるであらう。悪ければ社會的、國家的に亡びるであらう。さながら山の起伏、水の流れ、其を眺めるのと同じやうに自分の事を眺めて見よう。私はそんな事を考へてゐた。

子供が死んでからもう一年半にもなる。自然私がそんな考に住してからもう一年半になる譯である。さうしてどちらかといふと、私の事業は其一年半の間にいくらか歩を進めた。一向榮えない仕事も此一年半の間には比較的 success をした。が、たとひ幾ら成功しようともいくら繁昌しようとも、私は一人の子供の死によつて初めて亡び行く自分の姿を鏡の裏に認めたことはどうすることも出来無い。榮えるのも結構である。亡びるのも結構である。私は唯ありの儘の自分の姿をちつと眺めてゐるのである。

仕事は相當に運んで行つた。

或夕方私は窓に眩を凭せてちつと其邊の景色を眺めてゐた。部屋の前のお槻の落葉は

此二三日最も盛に降り注いでゐたと思つたが、もう梢に残つてゐる葉は餘程少くなつてゐた。其でも風が吹く度に其残り少なのすくの葉を尙ほ見事に振り落すのであつた。其から此槻の隣に今迄は殆ど常磐木かと思はれる程な青い色をしてゐた榎の葉が此頃少し黄色きいろを帯びて來た事が明あきらかに看取された。槻や榎は殆ど同時に落葉するものかと考へてゐたが、之で見ると大分遅速だいぶんがあるといふ事が判つた。

槻の残りの落葉が川面かはづらにおつかぶさるやうに降り込む。其川を隔てた向う岸むかうの一軒の板葺屋いたぶきやには壁に「おもちや御土産おんみやげいろくく」など書いた板が打つてあつた、其はおもちや屋の裏手になるのであるが私の泊つてゐる此宿の客に見えるやうに其處に板が打つてあるのであつた。其隣りは藝者屋で、これも裏側だけが見えるのであるが、時々三味しやみや太鼓が鳴るといふ外、一見してどうしても藝者屋とは思へなかつた。庭には霜枯れのした菊のあるのが破れた垣の間からちらついて、其上には洗濯物が干してあつた。其三味や太鼓も減多あつたには鳴らなかつた。少し川上の方には水車があつて、

其は休む時無しに絶えず回轉してゐた。霜の澤山降る朝などは其邊の板葺屋も庭も畑も橋も石も、凡て天地一面に眞白まっしろになるのであるが、其中で此水車だけはいつも水に濡れて黒い色をして廻つてゐた。私は草臥くたひれた仕事の手を休めてぼんやり其等の景色を眺めてゐると、其水車の手前の板橋の上を足早あしはやに歩いて來る一人の男が目に入つた。

其男は彼の湯風呂の中で逢つた男であつた。

丁度私のゐる部屋へやの前に來た時一寸帽子を取つて辭儀をした。

「私の座敷はこゝです。お立寄り下さいませんか。」と私から聲をかけた。

「有難う。」と言つて其男は其處に立どまつた儘私の方に脊を向けて矢張り私の見て居つた方向を見た。

「貴方は何處どこにお泊りとまりですか。」と私は其男の宿をたづねた。

「私は一軒家を借りて家族と一緒に住まつてゐます。」

「今橋を渡つてお出いでのやうでしたが、川向うにお住居すまひですか。」

「さうです。あの水車の向う側の家を借りてみます。」

日がだん／＼と落つるに従つて南の山の上の雲は眞赤な夕焼がし始めて、毎日續く此頃の天氣が、明日も又好晴であることを堅實に保證するやうに見えた。其夕焼を見上げた其男の顔はいつもよりは赤く彩られてゐた。

「一寸温泉に這入つて來ます。左様なら。」と言つて其男はさつさと足早に行つた。宿の温泉に來るのかと思つたら、川中に在る外湯に這入つて行つた。

「兎に角變つてゐる。」と私は思つた。職業は何だらう。官吏の非職とか、會社を辭職して慰勞金を貰つたとか、そんな風の人かも知れぬが、どうもさうらしく無いところもある。何だらう。と一寸判断がつかなかつた。

其から數日經つて私は夕飯後山腹の梅林のところを散歩した序に一つの徑を尙ほ辿つて登つて行くと、其處に怪しげな或場所のあるのが眼にとまつた。遠方からでも其臭氣で其がすぐ火葬場だといふ事が判つた。私はどういふものだから火葬場には非常に

縁が多い。流行病で亡くなつた私の兄を初めとして親戚のものや友人などを大分火葬場に連れて行つた。現に去年亡くした私の子も矢張り火葬場に連れて行つたのである。いくら設備がよく出來てゐるにしてもあの一種の臭氣だけは遠方から鼻につく。況して此處の火葬場は全く野天で、松林の蔭になつてゐる或空地に溝が掘つてあつて、其邊は灰ともつかず人の脂ともつかぬやうなものが黒ずんだ色をして一面に土地を染めてゐる許りであるので、其の臭氣は大分遠い處から私の鼻に傳つて來たのである。

「こんな所に火葬場があるのか。」と私は東京近傍の設備の十分に出來て居る火葬場許りを見て居つたので、此の荒寥たる光景を見て凄愴の感に打たれた。其時ふと眼にとまつたのは其溝のやうに掘つた穴の一方に小さい棺の置かれてあることであつた。

「おや棺が置いてある。」と私は其を凝視した。人も何もゐない此火葬場に唯棺が裸の儘で一つ置かれてあるといふ事は少なからず私の心をおびやかしたのであつた。

「どうしたのであらう。」

さう思ひ乍ら私は近づいて見た。其は小さい棺であつた。まだ生後一二ヶ月しか経たない位の赤ん坊を入れたものと受取れた。其にしても此棺を此處に持つて来た人はゐないのだらうか。隠坊はゐないのだらうか。私は再び其邊を見廻して見たが、其らしい人はゐなかつた。

私は心を落着けて四邊の容子を見た。其處に小さい一つの建物があつた。建物といふよりは盆の聖靈棚のやうな簡單なものに屋根だけはついてゐた。さうして其棚の上の一つの位牌のやうなものが置いてあつた。夕暮の光にすかして見ると「釋迦牟尼佛」と書いてあつた。其邊は埃だらけであつたが、其でも其前には線香立てがあつて、其に一束の線香が燻つてゐた。これで見ると今は人がゐないけれども、此處に此線香を供へた人が最近迄居たことだけはたしかに想像された。線香は硬い漏つた灰の中に亂雑に立てられたので、おもひくゝの方向に向いて、其中には消えたのもあつた。

私はちつと其「釋迦牟尼佛」といふ字に見入つた。其は誰が書いたのか下手な粗末

な字であつたが、其場合いかにも權威ある貴い字に見られた。此棺の中に這入つてゐる子供は誰の子供か、どういふわけで斯く淋しく此處に棄てられてゐるのか、其はどうであらうとも、兎に角此處に居る釋迦牟尼佛は其の對絶の權威で此のあはれな子供の亡骸を護つて居るやうな心持がした。萬卷の經文の中に出て来る釋迦牟尼佛よりも、此場合此の位牌の上に現はれて來てゐる釋迦牟尼佛は絶大の力があるものゝやうに私には受取れた。

暮れやすい日はもう大分其邊を薄暗くして來たのであつたが、其時片方の手に提灯をさげ片方の手に一束の薪を持つてひよつこり其處に現はれた一人の人があつた。提灯はまだ灯がともつてゐないので近よる迄其がどんな人であるか判らなかつたが、近よつて見て初めて五十餘りの男であることが判つた。

「今晚は。」と男は私の顔をしげく見乍ら挨拶した。一體私が何者かといふ事を餘程不審に思つてゐるらしい容子であつた。

「こゝは火葬場だね。」と私は態とそんな事を言つて見た。其が此憐れな男の不安を打消すことにならうかと考へたからであつた。

「さうです。焼場ですよ。」

果たして男は、私が散歩の序に偶然斯んな處に來會はせた浴客であるといふ事を合點したらしく、落着いてさう答へた。

私は何處迄も散歩客のやうな風を見せようとして當ても無く其邊をぶら／＼してゐた。さうして見るとも無く其男のすることを見てゐた。

男は先づ片方の手に提げてゐた薪を地上に下ろして、提灯を松の木にぶら下げた。

其から其薪をほどきかけたが大分手許が暗くなつて來てゐるのに氣が附いたらしく立上つて其松の枝にかけた提灯を取り下ろして其に火をつけ始めた。マツチをする時其大きな鼻と巖丈な手とが明かに照らし出された。

火のともつた提灯は置場所に困つて又もとの松の枝にかけられた。其は大分距離が

あるので其男の手許を照らすには十分で無かつた。

其でも其覺束無い光の下に其男は萬事を取運ぶのであつた。先づ懐から二三本の蠟燭を取り出して地上に置いた。其は此の提灯の蠟燭が盡きた時の準備と思はれた。其から先にほどきかけた薪の處ににじり寄つて其の中から席の切を四五枚選り出して傍に置いた。薪許りかと思つたら其席の切も一緒に縛られてあつたのである。

男は其から溝の所に置いてあつた棺を抱くやうにして片側によせて、其溝の底に先づ席の切を三枚許り置き、其上に薪を交叉するやうに積重ね、其上に又彼の棺を抱くやうにして載せ、更に其上に残つた薪を積重ね、其上に最後に席の切れの残りをかぶせた。

併し男は一向火をつける容子が無かつた。さうして尙ほ其近處を立去らずにゐる私を又不審さうに眺め始めた。

「お前は頼まれて焼くのかね。」と私は又近よつて行つてたづねた。

「いゝえお前さん、これは私の孫の佛様です。」と其男は不興さうに言つた。

「さうか、お前の孫さんなのか。可哀さうに。何病で死んだのかね。」

「矢張り腦の病氣だね。僅か三日許りの患で取られました。」と聲を曇らせた。

私は線香がもう燃え切つてしまつてゐる彼の建物の方を見た。提灯の光りは其處迄届かぬので、唯黒い小さな建物がぼんやりと見える許りであつたが、其暗闇の中にも彼の釋迦牟尼佛と書かれた文字が明に目に映るやうに思はれた。

私は此哀れなる男が其の棺の下の蓆の切れに火をつける前に其松林の蔭を出て歸路についた。山を下りながら後をふりかへつて見ると淋しい提灯の火影がものゝ陰になつたり現はれたりした。

彼の湯壺で逢つた男には其後逢はなかつた。或時又散歩の序に彼の水車小屋の處へ出て其らしい家を心當てに探して見た。門や柱は大破の儘になつてゐる一軒の家に萱

原といふ門標が出てゐた。門内には彼の藝者屋の裏庭に在るやうな霜枯れの菊が五六株あつた。私は大方此内であらうと思ひ乍ら通り過ぎた。

其日部屋へ話しに來た番頭に彼の萱原の事を聞いて見た。何事も早呑込する番頭は、私が彼の湯壺の中で逢つた男が萱原其人であるかどうかを慥かめる前に、滔々と萱原の事に就いて話した。

「あの萱原さんは何です。奥さんに關係したことか、其とも何か金銭上の事か、どうもあの方には何か祕密があるのだらう、といふ評判です。退役軍人だとかいふ噂がありますが、どう見てもさういふ柄には見えません。初め御夫婦連れで手前方へお見えになりましたして半月位御逗留でしたが、一先御歸京になつて、其から又お見えになつて、今度はあの家を借りてお住居になつたのです。もう半年もみらつしやいますでせう。奥様はよほどお美しい方です。……」

そんな事を立てつゞけに喋つたが、つい彼の湯壺の中の男が萱原であるかどうかは

聞くことが出来なかつた。けれども何か秘密のある男のやうだといふことが、ふと彼の男の神経質らしい顔に一層暗い影を投げた。

其晩の事であつた。警鐘が鳴つて「火事だく」と騒ぐ聲が聞こえた。雨戸を開けて見ると水車場のすぐ向側と覺ゆるところに火が燃え上つてゐた。

「萱原の家に相違無い。」と私は直覺的に思つた。「秘密のある男」と言つた番頭の言葉がすぐ其火事と結びついて、其處に何か變事が無けりやならぬやうに思はれたのである。萱原夫婦の屍が火中から出る事をも想像して見た。夫婦は已に逃走して此地にゐない事をも想像して見た。

が、翌朝になつて聞いて見ると、其は萱原の家では無かつたさうである。水車場の向うのやうに見えた火は夜だから近く見えたので半町も離れてゐたださうである。

私はふと萱原の上にとちらから強ひて異變を待設けつゝあつたのだといふ事に氣がついてをかしくなつた。其上彼の湯壺の中で出逢つた男が果して萱原かどうか、其さ

へ確定したわけでは無いのだと思ふと噴き出しさうにをかしくなつて來た。

其後又萱原の門を通つたが、菊が一層霜枯れてゐる許りで門標にも其他にも何の異變も無かつた。又彼の男の無事な後ろ姿をも二三度見かけた。

却つて一つの變事ともいふべきは、いつも私の部屋の前を手拭をさけて通つて居た三十七八の正直さうな少し足の悪い一人の男が或日巡査に腰繩を打たれて引張られて行つた。聞けば近處の百姓で、彼の水車場の向うにあつた火事の放火犯人といふ嫌疑でつかまつたのださうである。其も何か遺恨の放火であるらしいといふ事であつた。

概はもう夙くに枯木になつてしまつて僅に茶殻のやうな葉が二三枚宛枝の尖にへばりついてゐる許りであるが、彼の遅れて黄葉した榎が、もう二三日前から落葉しはじめて、今日あたりは少しの風にも持ちこたへられ無いで、網を投げるやうに降りそゞぐ。前の山の櫟林ももう赤つ茶けた色になつて、半分許り落葉した木の間には汚ない山



の地膚を見せてをる。山脈は其から左へも右へも延びてゐて、其右に延びた、中腹迄畑になつてゐる邊の梅林の向うに彼の火葬場の松林は見える。

すぐ川向うには例のおもちや屋、藝者屋の裏側が並んで、其隣の空地には四五匹の雄犬が一匹の雌犬を取り圍んで今朝から喧しく吠え立てゝゐる。よく見ると其中にも雌の歡心を得てゐる犬とゐない犬とがあつて、怪しげな遠吼のやうな聲を出して吠え立てゝゐるのは其のゐない方の犬であることが判る。

川上の水車は相變らず廻つてをる。其水車小屋の蔭に彼の萱原の家はある。

午前七時頃に漸く山を離れた太陽はだん／＼と中天に昇りつゝある。

私は是等の景色を眺めながら近頃妻の私に言つた言葉を思ひ出してゐた。

「私は其が不平なのです。」

其は私が、

「僕は此頃子供が病氣した場合に以前程一生懸命に介抱する氣にはなれない。」と言つ

た時に言つた言葉であつた。

眼の前の山川は其上に藝者屋やおもちや屋や水車小屋や萱原の家や、あの湯壺の中に居た男や、拘引された男や、火葬場や、其火葬場にゐた男や、赤つ茶けた櫟林や、坊主になつた槻や、落葉を降らす榎や、其等のものを靜に載せて、凡て時の移り行くのに任してをる。

「何が善か何が悪か。」

山川が靜にありの儘を其掌の上に載せて居れば時は唯靜に其等のものゝ亡び行く姿を見せるのみである。其處に善も無ければ悪も無い。私はたゆまうとする心を振り起こして袍の中の用事を片づけるより外に道はなかつた。(大正四年十二月)

## 内地の海邊より

誰かに手紙を書き度いやうな心持がしてゐたが、扱て誰に書いたものか、一寸其人  
が思ひつかかなかつた。ふと思ひついたのはあなたであつた。

時々手紙を貰つたのに其都度返事もしなかつた。御機嫌ですか。あなたの前には大  
同江の幅の廣い水が流れてゐる。綾羅島の煙のやうな楊柳が風に靡いてゐる。牡丹臺、  
乙密臺は後ろの空に聳えてゐる。永明寺の鐘は日に幾度鳴ります。あなたは今何をして  
ゐます。お牧さんは今何をしてゐます。私はふとあなたに手紙を書かうと思ひ立つた。

六七年前の朝鮮を知つてゐる許りで、其後の朝鮮は知らない。けれども毎日送つて  
來る京城日報と、其地に住んでゐる人の通信、其地に遊んだ友人の手紙などで、私の

心には絶えず會遊の朝鮮が思ひ出される。あなたは其時以來同じ朝鮮の同じ大同江畔、同じ牡丹臺下にちつと住まつてゐる。私は内地の海邊に變つたこともなく暮らしてゐる。お互に六つか七つ歳を取つたが、扱て其六七年間を何と考へたものか。お牧さんは何として其日を暮らしてゐます。お筆から手紙でも來ますか。素淡、洪さんの起居はいかゞです。

朝鮮もだん／＼内地化すると思ふ。所謂皇化に霑うて來るので結構なことは申す迄もない。大同江畔に自動車を驅つて牡丹臺に出掛けるとが出來ると聞いた時、私は愉快だと思つた。あなた所も、もうもとの板葺きと違つて、いつか送つて貰つた寫眞のやうな大建築だと思ふと自分の事のやうに嬉しい。けれども其内地化する反面に殖民地氣質といふやうなものが段々薄くなつて來はしないか。嘗て強く私の心を刺戟したところのものがもう大方亡くなりはしないか。私は其を心配する。其に就てもお筆はどうしたゞらう。あのお筆のやうな女が居なくなつたら朝鮮も詰らないやうな氣がする。

私は内地の海邊にちつとしてゐる。若し何をしてゐるかと思はれたら何と答へていだらう。私は爲すことも無くぼんやり暮らしてゐると答へたらいいだらうか。其とも斯んなこともしてゐる、あんなこともしてゐると數へ立てゝ見たらいいだらうか。私には判らない。

そんな事を考へ出すと私は人に手紙でも書き度くなる。けれども誰に書かうかと其人を考へると、いつも容易に見つからない。今度もなかく見つからなかつたが、ふとあなたを思ひ出した時に私は急に勇氣を得て此手紙を書き出した。

此海邊にはいろんな人の別荘があるが、嘗て趙重應子も來て居つた。其は海岸に出やうとするすぐ手前の砂丘の上に建つてゐる貸別荘であつた。私はよく其前を通つた。二階の欄干には白毛布や浴衣が乾してあつた。海を見晴らすやうになつてゐる廊下には籐椅子が置かれてあつて、時々其處に横はつてゐる趙子を見受けた。京城で一度逢

つたことはあつたが、先方は私の顔はもとより私の名さへ覚えてゐる筈は無いと思つたので私はいつも其前を素通りした。兼て病身だといふ事を聞いてゐたが、其爲め此の海邊に静養に来てゐたのか。其とも他に何等かの意味があつたのか。

此の籐椅子の置かれてある廊下の正面に當つて、海上何十里かの沖に大島は横はつてゐるのである。天氣の晴れた日に其噴煙の見えることもあるが、何日間も其島の見えぬこともある。もと船長をしたことのある私の知人——尤も私より十歳以上の年長者で、今は此地に立派な邸宅を構へて餘生を養つて居る——は斯んなことを話した。

「大島がはつきり見えたら必ず四五日うちに雨が降る。」

私は其から後ち氣をつけて見るが、果たして其人のいふ通りである。

私は此の人とよく酒を飲んで話すことがある。酒の酔ひを假りて話すので、あとから考へると、どんな話であつたか記憶に残らぬことも多いが、好んで哲學上の話などをする。此人は佛間のやうなものを其立派な邸宅の一間に拵へて居る。其は神でも無

い佛でも無い、唯宇宙の本體を祭つたものださうである。

「神といつたり佛といつたりするのも矢張り貴方が仰しやる宇宙の本體では無いのですか。」と私は其時其人に尋ねて見た。

「さうかも知れません。けれども神とか佛とかいふ事になると其を拜まねばならん。私の本體は拜む必要も何も無いのです。」といふのが其人の答であつた。

永明寺の和尚さんといふのはどんな人です。いつか寄せ書きの葉書を貰つた中に和尚さんの名が見えてゐた。字が旨かつたが、朝鮮人ですか。内地人ですか。

税關横から大同江を隔て、船橋里を見た夕暮の景色は忘れ兼ねる。殊にあの楊柳の柔かい丸い線は内地の柳など、は違つた心持を與へる。たしか綾羅島にもあの楊柳が澤山あつたやうに記憶してゐるのだが、さう澤山は無かつたですか。

税關長の鯨岡君の死は残念であつた。あの税關官舎に来て一夏を過ごしてはどうか。

晝間は少し暑いが晩涼を追うて大同江に舟を浮べれば一日の苦熱は忘れられる。一室を與へて勝手にほうつて置くから何か書きに來い。など、手紙をよこす度に言つて來てくれた。私は餘程行き度かつたが其頃から此の海邊に心を牽く別のものがあつたので到頭行かなかつた。

此の心を牽くものは遂に私に一つの建築迄させた。尤も其建築は彼の老船長をはじめ私の志を賛した財力ある多くの人の力で出來たので、私は唯だ其を思ひ立つたのに過ぎなかつた。其建築物は丁度昔此地に幕府のあつた時代に幸若や猿若の掛小屋があつたといふ邊に建てられた。其建物は、其強く私の心を牽くところのもの、具體化であつた。私等は其中に在つて奏で舞ひ謠ふのである。

私は今迄神社や佛閣に參詣しても其神社や佛閣を唯建物として眺めてゐた。けれども此頃は其處に在る小さい辻堂一つでも、其が出來上る迄の因縁を思はずにはゐられない。今は朽廢してゐる冷めたい靜かな建物でも、其が出來上る迄の人間の血潮ちまの騒

立ちを思はずにはゐられ無い。

其に就いても氣になるのは晝舫である。これも主として鯨岡君の盡力によつたものであつたが、君が中途に斃れてから種々の人の種々の盡力のもとに出來上つた。殊に此の工事に携はつた船大工の献心的の努力を傳へ聞いた時私は初めて晝舫に生命が這入つたやうな心持ちがした。其處にも矢張り湧き立つた人間の血潮がある。一人ならず二人ならず大勢の人の湧き立つた血潮がある。

其にしても晝舫が動かぬといふのは本當ですか。舟が重くつて潮流の急な時に出喰はずと進まぬといふのは本當ですか。昔此地に在つた將軍の一人がこゝの海岸に船を作らせた。其は宋人の言に聞いて、自分の運命を前知して、遠く海に浮んで唐、天竺に渡らうとしたのであつたが、船が重くつて出來上つても浮ばなかつた、といふ話がある。大同江の晝舫も其類ですか。晝舫の保管はあなた處に託するとかいふ事であつたがどうなつてゐます。

併し乍ら大同江水に浮んだ畫舫はたとひ動かなくつてもよい。其は又私の心を牽くもの、具體化の一つである。他日私は又お筆、素溪、洪さん等と其中に在つて奏で舞ひ謠ふ時が無いとはいへぬ。

此頃になると此地にも澤山の人が入り込んで來ます。よく子供の手をひいて歩いてゐる男がある。子供は何事をか父に話しかけるが、父は大方答へなかつたりしてゐる。大概な父は子供とは別々の事を考へてゐるらしい。女もぞろ／＼と澤山通る。女に二通りの匂ひがある。一つは甘いやうな匂ひがするのと一つは強烈な匂ひがするのと。甘い匂ひは白粉の匂ひで、強烈なのは香水の匂ひかも知れない。さういふ事に不案内な私は唯行き逢ふ途上の女を甘い匂ひの女、強い匂ひの女と區別する。此頃はさういふ二種類の女に澤山出逢ふ。

葛のからまつた門がある。其は料理屋である。私は此奥でも老船長と話したことがある。老船長は、世の中に進歩も退歩も認め無い、唯運行を認めるといつた。其時丸い月が森の上に出て、灯取蟲を防ぐ爲めの大きな篝が庭に焚かれてゐたことを覚えてゐる。

其門前を少し過ぎると其處には停車場がある。いつも相當に賑つてゐる。私は三四日に一度は此の停車場を昇降する。東京に事務所を持つてゐる私は少くも一週間に二度は其處に通勤せねばならぬのである。停車場にゐる人は皆相當に亢奮した顔をしてゐるが私は一向亢奮しない。私はぼんやりとして汽車に乗り、ぼんやりとして汽車を降りる。

思ひ出すのはあの殖民地的な粗大な汽車である。私は時々彼の黒い大きなものを思ひ出す。さうして惰眠から覺めねばならぬやうな心持がする。

私の事業は今のところ、たいして成功したといふでは無いけれども其でも不成功といふのも無い。私の事業を背景にして世間に面出しをしても誰もさう私を輕蔑する

ものは無い。併しながら、これが、がらりと一變して、世間が皆私の敵になつて、私は到るところで垢罵され嘲笑されるやうな時が來たらどうであらう。必ずしもさういふ時が來ないとは限らぬ。

さういふ時が來て見度いやうな心持もする。其時はどんなに痛快なものかとも思ふ。私が生活の單調に飽いて、惰眠から覺めねばならぬと考へる時先づ私の耳に響くものはあの吼えるやうな釜山灣頭の汽笛の音である。二本のレールは其處を起點にして滿洲の野を過ぎり、西比利亞を横斷して居る。お筆は今何處にゐるでせう。安東縣から手紙をよこした切りで私の方には消息を絶つてゐる。

私が内地の海邊の生活に飽いた時今度見出す土地は、是非共玄海を越して先で無ければならぬやうに思ふ。玄海の浪は先づ眠つてゐる私の血潮を湧き立たしめるのに最も恰當のものである。さうして落着く先は義州より手前か、安東縣より先きか。

もうあなた方のやうに十年餘りも住みなれて見ると牡丹臺程住みやすい土地は無いでせう。獨りあなた方に限らず、其地に住まつてゐる多くの人に在つては、もう今日になつて朝鮮内地の區別は無いでせう。

「内地の海邊に厭いたら玄海を越す。」といふ言葉はぎやうくしい言葉に響くでせう。實際七年前私をはじめて其處を越ゆる時ですらも飯櫃はんぼを褌で縛つたのを片手に携へて脊中に子供を負つた儘で乗り込んだ女を見た。其女等の爲めには玄海は表の溝川位にしか考へられてゐなかつた。朝鮮に行く位は朝飯前の仕事であつた。あなた等夫婦が大分縣から出て來て、永明寺畔に板葺屋を拵へたのも矢張りそんな心持であつたのでせう。お牧さんが三人の朝鮮人の賊と格闘して知らん顔をしてゐたのも同じやうな心持であつたのでせう。

それはさうかも知れないが、私等のやうに内地の海邊に静かな眠つたやうな生活をしてゐるものゝ身に在つては、再び歸らぬ積りで玄海を越ゆるといふやうなことはこ

れで相當の發奮を要する。

其上其等の土地は果たして快く私等を迎へるであらうか。其處には私等の心の儘になる——私等の心を向うに移して私等と同じものにする事の出来る——江山のみがあるであらうか。其處には今日の生活に苦しみもがいてゐる多くの人はゐないであらうか。私は其地の宿屋にあつた時に、私や同伴の友人を訪問して來た多くの人に面接触した。私が其等の人から受けた印象は決して快いものでは無かつた。其等の人額の皺には惡戰の痕があつた。其等の人鋭い眼尻には苦闘の皺積ひだがあつた。其等の人、どの尺寸の土地でも一片のパンでも其を分與せよと内地から入り込んで來たものを、どんな顔色をして迎へるか。其は決して無心の江山と同日に見ることは出来ぬであらう。

若し義州以南の土地が私を容れなかつたら、其處には別に安東縣以北の土地がある。今度又新たに長春以北の土地が出來たさうである。西比利亞にすら自由に居住し得る契約が結ばれたとかいふ事である。二條のレールは際限も無く北へくと人を導く。

お筆の手紙に斯うあつた。

「……天草や島原の女が一番えらいんですつてね。豆滿江を拔手を切つて泳ぐんですつてね。

……安東線の出来る時分の事ですつて。お金は皆指輪や腕輪にして肌につけ、金目なものは風呂敷に包んで自分の脊中に脊負ひ、大きなものは苦力に脊負はして五六人位宛が一組になつて、其安東線のレール傳ひを北へくと歩いて行くんですつて。其がをかしいのよ。皆裾をからげて赤い湯もじを出して、大きなお尻を動かし乍ら北へ北へと歩いて行くんですつて。其が私には旨く書けないけれど、其人のお話は面白いのよ。目に見るやうに話すんですもの。

其が皆第一軍ですつて。豆滿江を拔手を切つて泳ぐ手合ですつて。

私何だか其女は今でもレール傳ひに北へくと歩いて行つてゐるやうな氣持がするの。……」



これは前夜に新義州からよこした手紙であつたが、其翌日安東縣からよこした最後の手紙にも斯うあつた。

「……私昨日汽車の中で聞いたあの話が面白くつて。まだ赤い湯もじを出して大きなお尻を振つてレール傳ひを北へくへ行つてゐるやうに思はれるの。もう長春ハルビンはとづくに過ぎてしまつたでせうね。……」

其お筆は何處に行つてゐるでせう。

此の六七年間の私の生活！ 此の海邊に在つて強く私の心を牽いたところのものに殆ど没頭して日を暮らした此の六七年間。東京に事務所を置いてやつてゐる事業は、私の勤惰に拘らず、相當に効果を收めつゝある此の六七年間。其は牡丹臺が聳え大江が流れてゐるやうに、唯一個の動かすことの出来ぬ事實として私の前に現前してゐるだけのことである。其以上の意味は私には判らない。老船長は「物の進歩も退歩も認めない、唯物の運行を認める。」と言つた。

私の事業なんか詰まらぬ事業だが、其でも相當に運んで行くのは唯古くからやつて來てゐるといふだけの理由に外ならぬ。今から二十年前に始めた仕事は今日初めて著手する仕事に比して非常に安易である。今日私のやつてゐるやうな仕事を思ひ立つ人は數限りも無くある。しかし其は人の踏まへてゐる土地を更に踏まうとするのであるから容易なことでは無い。非常な金銭と勞力をかけて其で大方失敗する。此一事を見ても維新後一時崩壊された社會組織がだんくど動きの取れぬものになつて行つて、古い歴史を有するもの程其位置の安固であることを證明してゐると言つてよい。——尤もいくら古い歴史を持つてゐても或物に逆行すれば忽ち崩壊を免れぬことも亦た澤山の實例に見る通りであるが。——さういふ意味に於て内地の生活よりも殖民地の生活には自由があり活氣がある。あなた方夫婦が大分縣から踏み出して一躍牡丹臺の王

様になるやうな自由もある。お筆が私と二十分間の夫婦を約束するやうな自由もある。剛三初め男女の一連が忽ち京城に現はれ忽ち義州に現はれるやうな活気もある。慶之助の如きぐうたらですらもが尙ほ平気で鷄林八道の山河を股にかけてをる。

けれども其殖民地でも、もう朝鮮は餘程内地化しつゝあることと思ふ。あなた等の茶店ですらもが、もう十年の歳月を閲するではありませんか。第二のお牧さん夫婦があつて、大分縣を出て来て、牡丹臺に足を踏みかけたところで、もう第二のお牧の茶屋はさう容易くは出来はしない。今日の朝鮮に果たして剛三やお筆のやうなものを容易に容れる天地があるであらうか。箆口具を箆められたゞけで何百圓かの月給を貰ふ豪傑が一人でもをるであらうか。

お筆の感心した、あの赤いゆもじを出して大きな尻をふり乍らレール傳ひに北へ北へと進みつゝあるといふ第一軍は今何處に居るか。其お筆は今何處に居るか。

其レールを傳ひく行つた先きには今大戦争がおつばじまつてゐるではありませんか。赤いゆもじは其邊迄行つてゐるのかも知れん。

内地の海邊の生活は單調です。庭には松が澤山生えてをる。其松が一年に一尺位宛縁を延べて行く。私の家でも私が引移つてから五六尺は延びた譯である。夏の末になるといつでも蜻蛉が其松の梢から生れ出たやうに飛ぶ。秋も半過ぎになると黑板こくばんの文字を消したやうに其蜻蛉は大空からみなくなつてしまふ。土地には赤い鶏頭がだんだん黒ずみながら突立つてゐる。其は霜が來たのである。其から雪が來る。梅が咲く。葵が咲く。松の縁が一尺宛延ぶ。

私は私の心を牽くところのものに没頭する。毎日のやうに彼の建物に出掛ける。

粗大な殖民地的な大きな汽車が釜山を出てから北へ北へと進む。長春、ハルピンを過ぎてもつとく進む。雪の中をもつとく進む。

しかしあなたの茶屋生活も面白くはあるまい。同情します。  
赤いゆもじだつて面白くないに極つてゐる。

唯事實があるだけの事だ。

もう手紙もいやになつた。お牧さんによろしく。(大正五年六月)

## 兄

私が兄に對する最も舊い記憶は曾て何かに書いたことがあるやうに、縁臺を表に出して、高繩山の麓に狐が火をともしのを見ながらお伽噺をして呉れた時のことである。道端には僅かに家が四軒並んでゐるばかりである。夕暮の色は其邊を一面に罩めて、縁臺の上に置かれてゐる煙草盆の一點の炭火の色がだん／＼と赤さを増して來るほか、そこに大空に星が輝き、狐火の數が増して來るばかりで、此方をさして來る提灯の光が一つあるでもなく、私等のやうな子供は皆兄を取巻いてそのお伽ばなしの話の筋の運んで行くのを熱心に待ち設けるのであつた。私の年齢が其頃五六歳とすると、兄の年齢は二十五六であつたのである。その頃郷居した四軒の家の青年のうちでは兄が一番の年長者であつて自然斯ういふまとゝには誰からも兄さん／＼と呼ばれてその

兄

中心になるのであつた。其頃兄は月給參圓で其村の小學校の教師をしてゐた。私は此村を去る一寸前に一度其學校に行つたことがあつた。教師といふのは兄一人であつて、どんな建物であつたか記憶せぬが、男の子や女の子は粗末な机を前に置いて、粗末な腰掛けに大勢が一緒に腰を乗せてゐたやうに覺えてゐる。兄が非常に不愉快な顔をして疳癪らしい筋を眉間によせて一人の生徒を叱りつけて居つた様子が眼の前に浮んで来る。兄は結婚してから子供が無かつたので二十も年の遠ふ私を自分の子のやうに可愛がつてゐた。それで家庭に於ける兄はそれほど怖いものゝやうに思つてゐなかつたが、此教壇の上に立つて黑板を後ろにして手に鞭を持つてゐる兄の様子はがらりと變つて極めて恐ろしい人に見えた。私はもう二度とその學校へ行くのは厭であつた。私に二つ年上の隣家の子供が翌日又私を連れて行かうといつて誘ひに來たけれども、私は行くのは厭だと言ひ張つた。母や父や祖母やの間に相談が始まつて、もう近いうち此村を引上げて松山へ歸るのであるから、松山へ歸つて後に學校へ入れることにし

た方がよからう、厭なものを強ひてやらないでもよからうといふやうな話があつて、たうとうそれ切り私は學校へ行かないでもいゝことになつた。私はその恐ろしい兄の學校に行かずに済んだことを子供心に非常に安心した。

兄は十八歳の時、父から一家の經濟を任されたといふことを此五六年前に私に話した。さうして其時父から受取つた金は現金の八拾圓だけであつたといふことも話した。兄が十八だつたといふと、それは私の生れる三年前のことである。その頃の八拾圓といふと今日の八百圓にも千圓にも當るのであらうけれども、それにしても豊かな金であつたといふことは出來ぬ。その上の財産といへばたゞ家だけであつたのであらうが、その城下の家を賣り拂つた金で又田舎の家や田地を買つたりしたのであるから、田舎に移つて後兄の手許にあつた金も極めて少額のものであつたらう。父は家を舉げて百姓になる積りであつたのであるらしいが、身體の虚弱であつた兄はもとよりそんな力業の出來るはずがなかつた。それで參圓の月給をとつて村の洩たれつ子の世話をして

したのであつた。兄の頭には、その十八歳の時父から經濟を任されて以來、如何にして一家を支持して行くかといふことが大問題であつた。祖母と父母と三人の弟とを控へて、而も維新の變革後、秩祿を失つてどうして一家を支持して行くことが出来るであらうかといふことは其氣の細い正直な頭には大問題であつたのである。これは此間兄が死んで後、次兄が私に話したことであつたが、それはまだ二人の兄共に子供の時代であつたので、兄が父から經濟を任かされたといふその十八の時よりもつと以前のことであつたらう。維新の動亂に際會して舊藩廳からはたび／＼儉約の布令が出る上に、秩米も家中一般に半減するとか、もしくは米で渡さずに其時の相場よりも安い金に引換へて渡すとか、財政窮乏の爲めに受取るところの俸祿は兎角減少し勝ちであつた。其時のことであつた、兄は、

「一寸話があるから此方へおいで。」と言つて次兄を裏庭へ呼び出した。次兄はどんなことだらうと思つてついて行つてみると、兄は極めて嚴肅な顔で聲を沈ませながら斯

う話すのであつた。

「お前も知つて居る通り、此頃は儉約々々で秩米も大分減らして渡されるやうな譯であるから、餘程引しめてやらないと、一家の經濟が持つて行かれないと、お父さんやお祖母さんが心配して話してゐられる。そこで、あしが考へるのは他に仕方もないから、お互に食ふ飯を一杯宛減らすことにしようではないか。お前はどう思ふ。」とさういふのであつた。風を揚げたり獨樂をまはしたり、脇差を引抜いて庭の立木に傷をつけたりするほか考のなかつた次兄は、どうも此飯を一杯宛減らすといふ兄の言葉が腑に落ちなかつた。そこで斯う答へた。

「何かほかの事で儉約をするといふのなら賛成もするが、飯を一杯宛減らすといふことは賛成が出来ん。」

兄は弟の其答を聞いてしばらく考へてゐたが、それからは強ひて主張するでもなく其話は終にそれ切りになつてしまつた。と斯ういふ話であつた。次兄がそれを私に話

兄

した時に笑つた。私もそれを聞きながら笑つた。けれども二人とも眼の底に涙のにじみ出るのを覺えた。兄はその頃から一家の嫡子として經濟の上に責任を感じて常に自分の身をつめることを考へてゐた。田舎に移つて後でも矢張り一家の經濟を支持して行く爲に百姓や漁師の洩たれつ子の世話をすることを厭ともいはなかつた。家を擧げて松山の城下に歸るまで六七年の間、その榮えない小うるさい仕事に我慢して携つてゐた。しかも其俸給は三圓より以上には昇らなかつた。其頃の參圓といふと矢張今日三十圓にも相當するであらうが、それにしても一家八人の暮しを立て、行くのは決して容易でなかつたに相違ない。尤も父は親しく鋤をとつたり、肥桶を擔いだりして働いてゐたのであるが、その慣れぬ野原の仕事から果してどれほどの収益を得たであらう。嚴格にこれを計算してみたら、それは却つて損失を招きつゝあつた仕事かもしれなかつた。城下の家を賣つて田舎へ引つ込んだのは私の生れた年か翌年かであつたのだから兄の二十一か二の年であつたのである。それから再び松山に歸つたのは私

の八つの時であつたから、兄の二十八歳の時であつたのである。さうすると二十一から二十八歳までの、草木にすれば若葉の萌え立つたやうな青春の時期を、兄は田舎の洩たれつ子の世話をして過してしまつたのである。尤も其間にも快樂が絶無であつたとはいはれない。兄は結婚をした。それは軒を並べて郷居してゐる四軒のうちの一軒へ裁縫の稽古に来てゐた娘であつた。その裁縫を教へてゐる女の人兄よりも二つか三つ年上の人であつた。兄が死ぬる數日前のことであつた。私にこんなことを言つた。

「姉さんのことはよろしく頼む。あれもうちへ貰つてから少しは教育してやるつもりであつたのぢやが、お前も知つてゐる通りお祖母さんの世話、お父さんの世話、お母さんの世話、とだん／＼さういふことに追はれてゐるうちに年をとつてしまつて教育することも出来なかつた。あのまゝではいかん／＼と思ひながらも、お祖母さんとはとより、お父さんやお母さんの氣にも入つてゐたものぢやけれ、あしも我慢をして來

たのであつた。あしが死んで後お前が世話をするといつてもいろ／＼困ることがあらうと思ふが、お祖母さんやお父さんやお母さんの世話をして来たことに免じて、それは我慢をしてもらはねばならぬ。」

兄の言葉にあるやうに、此嫂は祖母初め皆んなの氣に入つてゐて、兄を援けて一家の經濟を支持して行く上にも大功勞があつたのである。二十四五の青年と十七八の娘との新婚はもとより楽しいものであつたに相違ないが、三人の舅、姑、三人の小舅のある舊式の家庭は今日の若い男女が経験するやうな自由なものではなかつたに相違ない。のみならず其間には、一年経つても二年経つても子供の生れさうなけしきはなかつた。四年経つても五年経つても同様であつた。子のない夫婦の間の愛情は、たとひ濃やかであつても、物足りない淋しさが常につきまといつてゐた。

結婚といふことのほか兄の心を慰めた何物があつたらう。そこには白砂青松の濱があつて、沖には白帆が浮んだり、夕陽が沈んだりする静かな海があつた。野には若草

が萌えたり雪が松原を降り隠したりする四時の移り變りがあつた。四軒の家族のものが一緒になつて濱の松蔭に陣取つて鬼事をしたこともあつた。その中には兄の低音の笑聲も嫂の高音の笑聲も交つてゐた。殊にそれ等若いものゝ中に、年とつた人も交つてゐて、霞が野も山も包んだ中に人は年齢をも境遇をも忘れて笑ひ興ずることが出来るのであつた。そんなことは北風が窓に吹きつける寒い冬の夜にもあつた。それは此四軒のものが中心になつて、それに村の醫者や、他の學校の教員などが加はつて、新古今集の加留多をすることであつた。其加留多に慣れない年とつた村の醫者や愚直な學校の先生などは、いつも極つたやうに負けてその楽しいまゝに興味を添へるのであつた。

芝居や相撲のやうなものも滿更此田園生活に縁がないことはなかつた。一里足らず離れてゐる善應寺といふ村の或鎮守の境内に相撲が掛かつたことがあつた。それはどんな相撲だか覚えてゐないが兄は私をつれて見に行つた。丁度そこへ着いた時に、十

重二十重に築かれてゐる人垣が一度にワーツと聲を揚げたので、初めてさういふことに出會はした私は忽ち兄にしがみついて泣き出した。

「怖いことはないから中へ這入つて見よう。」と兄は私に勧めたのであつたが、私は兩手で兄の袂に縋りついて、「怖いから歸らう。」と言つた。兄は一番の勝負も見ずに私を連れて歸るのであつた。芝居も半里餘り隔つてゐる北條といふ村に時々かゝつた。それは定小屋があるわけではなく、席圍ひのものを臨時に作り上げるのであつて、母は珍らしく私を連れてその芝居を見に行つた。此時も同じく木戸を這入るや否や、舞臺の上には袴を着た男が刀を抜いて腹を切つてみたので私は又聲を張り上げて泣いた。それで母は又木戸錢を棒に振つて、私を負つてうちへ歸つて來た。そんな風に田舎相撲や田舎芝居は滿更ないでもなかつたが、然しその六年間に私のうちの者は幾度さういふものを見に行つたらう。恐らくさうたびくはなかつたらう。

六七年間の田舎住居は、その白砂青松や、その峯巒野徑やのほかに殆んど耳目を樂

ましめるものは無かつたといつても過言ではあるまい。それが兄や嫂の青春の時季であつたといふことの爲に、その後何かにつけてその時代のことが話に出ると、兄は尠からず興に乗るのであつた。

「まアあの頃が一番暢氣な面白い時代であつた。」とよく言ふのであつた。けれども其當時にあつては、

「いつまでも斯うしてはゐられない。」といふ焦燥の心持が兄にあつたに相違ない。前に言つた通り三圓の収入で此一家をどうして支持して行くことが出来るであらうか。次兄も三兄もそれく志を立て、學校に這入つたり、實業についたりしたのであつたが、一番末弟である私は漸くにして學齡に達して、これが又相當の費用を要するし、物價は年を追うて騰つて行くばかりであるし、とても斯うやつてはゐられない。といふ考は絶えず頭の中を往來してゐたに相違ない。そこで或人の周旋のもとに松山に出て縣廳の傭に採用されることになつた。其時の月給は五圓であつたかと記憶する。



松山に出てから私はいよいよ小學校へ通ふことになつた。私は祖母が拵へて呉れた草紙に手習ひをした。墨は濃いほどいゝといふので一生懸命になつて磨つた。さうして眞つ黒に光つてゐる上に益々濃い墨をつけて手習ひをした。それから一枚づゝ清書が出来ると祖母はそれを丁寧に清書挟みに挟んで欄間の釘にかけた。私は祖母に褒められ、父に褒められたあとで縣廳から歸る兄が何といふであらうかと待ち設けつゝその鴨居へかゝつてゐる清書を自分で眺めた。よく出来てゐると褒めて呉れた時の顔は非常に懐かしかつた。けれども念を入れてそれを験べた末、こゝの畫はもつと正しくしなければいかん、このはねは斯う云ふ風に力を入れなければいかんといふ時の顔は、どこか嶮しく恐ろしいやうに思はれた。さういふ時には傍にゐた父が、

「まだ八つや九つでそれは無理だ、それ位に出来ればマア上出来の方だ。」と泣きさうになつてゐる私の顔を見てなだめるやうに言ふのであつたが、兄の眉間には縦に幾條かの皺がいつまでも深く疊まれてゐるのであつた。

友達が風を揚げてゐるのを見ると私は矢も楯もたまらなくなつて風をほしがるのであつた。けれどもそれを兄に切り出すことは容易に出来なかつた。たとひ一枚の風でも、さういふ無駄なものを買ふことは兄の好まぬところであつた。私は母や祖母に散ねだつた末に、祖母が赤い裏の財布から出した錢で漸くそれを買つて貰へるのであつた。或時私は隣家の友達が七夕竹をたてゝゐるのを見て、是非自分のうちにもそれを立てたいと思つた。いろ／＼懇願した末に赤や黄色や紺や緑やの七夕紙が二三枚づつ買つてもらへた。それに白い半紙も交せて何十枚かの短冊が出来上つた。私は初めてさういふ贅澤な希望の容れられたことに非常な満足を覺えつゝ、硯に稻の葉からとつた朝露を注ぎ込んで、兄の教へて呉れた七夕様とか、天の川とか、二星様とか、其他五六の七夕の歌を書くのであつた。ところがどういふものだから拙い字が續けさまに出来た。私はこんな拙い字を書いたのを兄に見られたならば定めて叱られるであらうと一人心中で怯えた。そこでいろ／＼思ひ煩つた末に、私は其中で比較的正しく字

の書かれたものだけを選び出して、それを笹に結びつけた。さうして字が曲つたり、墨がにじんだり、書き損つたりしたもの、皆んな一つに丸めてしまつて、裏庭の秋草の茂つてゐる中にそつと隠して置いた。兄はこれから縣廳に出勤するといふ時に、庭に立てられた淋しい七夕竹を見て、

「これは非常に短冊が少いではないか、こんなに少いわけはないが。」といぶかしさうに言つた。祖母もまた、

「ほんとうにこれは淋しい、色紙一枚で八枚も短冊が出来るのに、こんなに少いわけはない。」と私の顔を見た。さう容易く看破されるものではないと思つてゐた私は、此二人の言葉を聞いて大いにまごついたけれども、今更裏の秋草の中にかくしたともいはれぬので、初めからそれだけほかなかつたのだと言ひ張つた。兄は非常な不機嫌な顔をしてゐたが、時間が迫つて來たので其まゝ出勤した。私も氣が咎めながら學校へ行つた。學校から歸つて後に、祖母は言葉を柔らげて、決して隠くしてはいかん、残

りの短冊はどこにあるかといふことをはつきりといへと言つた。私は終に秋草の中に隠したことを白状せねばならなかつた。祖母は笑つたばかりで別に叱りもしなかつた。私の心は學校に行つてゐる間も不安に充ちてゐたのが、今本統のことを白状しても祖母は別に叱りもしなかつたので、妙に興奮して浮き立つてゐた。それから祖母の命ずるまゝに敷のよつてゐるそれ等の短冊を丁寧に延ばして悉く七夕竹につけ足した。七夕竹が一時に賑やかになつて、遠目に見た文字の汚いのや間違などは目にも立たなかつた。私の心は更に浮き立つてゐた。そこへ歸つて來たのは兄であつた。祖母は、

「兄さんに言ふたら叱られるから言はぬことにしよう。」と言つた。私の浮き立つてゐた心は、どうも此まゝ黙つてゐることが出来無かつた。却つて私の方から進んで祖母に話すことを促した。祖母はそれでは話さうと言つて一伍一什を話した。袴を解きながら眉間に皺をよせて聞いてゐた兄は忽ち、聲を荒らげて私を叱りつけた。私は青くなつた。

「なぜそんな隠しだてをした。嘘を言った。」と曇みかけて兄は私を攻めた。私は一言半句もそれに答へることが出来なかつた。さうして終に祖母の仲裁で兄の前に、以後は決してさういふことはしないといふ誓を立てねばならなかつた。

私は父よりも兄を怖いと思ふやうになつたのは此頃からであつた。兄の眉間には絶えず皺があるやうに私の目には映つてゐた。田舎から城下に出て来て他郷人も交つてゐる縣廳の下級官吏として、毎日腰辨を下げて通勤することは決して愉快なことではなかつたに相違ない。祖母や母はもとよりのこと、父ですらもが成るべく兄の疝癪に障らぬやうにと物を言ふにも氣をつけてゐるやうに思へた。

兄の五圓といふ給料は、どういふ順序で昇給していつたか、それは委しく私の記憶にない。只或辭令書を父の前に置いて、いつもの皺を眉間に寄せながら不愉快さうな顔をして坐つてゐるのを、父は諄々として諭しつゝある、さういふ光景を一二度ならず私は見たことがあつた。さういふ時兄は自分の上官の偏頗を憤つて、同じ地位であ

つた同僚の者が自分よりも多く増給して上位に立つやうになつたのは不埒だといふやうな語氣を漏らしてゐた。兄の一圖な正直な性質は決して上官の機嫌に入るものではないといふことを知つてゐるものゝやうに、父はその上官を恨むことを決して賛成しなかつた。さうして父が舊藩に役人として出てゐた頃の實驗談をして、さういふ場合の心の慰め方などを話して聞かせたりしてゐた。さういふやうな譯で縣廳に於ける兄の昇進は決して愉快なものでなかつたに相違ない。

かゝる間にも兄は一家の經濟を如何に支持して行くかといふ上には、不斷の苦心をしてゐた。松山に歸つた當時は暫く借家住居をしてゐたが、間もなく兄は市外の東端に一軒のうちを見出してそこを買ひとつた。これは田舎の家を賣つた金を土臺にして、たとひそれに若干の金を借り足したにしても、家賃を拂ふよりは比較的利益であるといふやうな委しい計算をたてゝの上のことであつたに相違ない。初めそこは家ばかりで地面は他人のものであつたのであるが、それも何年か経つうちに終に兄は自分のも

のにしてしまつた。それにも兄は極めて細密の注意を拂つて成るべく無駄な費へをせぬやうに、成るべく安い値段にそれを買ひとつたものに相違なかつた。

兄が縣廳から郡役所に轉じて郡書記になつたのはそれから二三年後のとであつた。その間に祖母が死んだり、兄自身も大病をしたりして不時の費用を要したことも多く、兄の經濟は決して樂ではなかつたのである。それで縣廳の傭よりも判任官として郡書記に轉ずることは、位置から言つても収入からいつても、少しは兄の心を慰めるに足つたものであつたらう。然し其郡書記生活も十年とは續かなかつたやうに記憶する。それは先輩の勤めで舊藩邸に出勤するやうになつたが爲である。父の身になつてみると、たとひ奏任官になつて縣廳や郡役所に出るよりも、舊藩侯の用人となつて其邸に出勤するやうになることは非常に落着いた心持のことであつたに相違ない。兄に於ても亦、父ほどではないにしても、他郷人の澤山入り交つてゐる縣廳や郡役所にゐて、其正直な一刻な性質に種々な壓迫を受けるよりも、矢張或點まで父の餘德のもとに親しみの

深い舊藩侯の用人となることは不愉快なことではなかつたに相違ない。尤も其藩侯の用人となつて後も、兄の昇進は決して早いものとはいへなかつたやうである。それに對する不満の情の見える度に、父は又諄々として自分の經驗談を試むるのであつた。

私が中學校で學ぶ費用は、もとより小學校の時の比ではなかつた。けれども私の成業といふことに多大の望みを囑してゐた兄は、少しも其出費をいとほなかつた。それから、

「お前は何になるつもりか、何にせよ人間は金がなければ世間に立つて物が言へない。金をまうけるには一番醫者がいゝと思ふが、醫者になつてみる氣はないか。」とよく口癖のやうに言つた。其頃私の考は取りとめもない夢を見てゐるやうなものであつた。末廣鐵腸や尾崎學堂が政治の遊説に廻つて來て、溢れるやうな聽衆を集めて政談演説をする其華やかな光景に心をとられ、五六の同級生と演説會を開いたこともあつた。初めて化學の實驗といふものを覺えた時に、斯ういふ所に閉ち籠つて碩學の名を天下

に馳せる世界的人物を憧憬したりもした。さうして兄の「金まうけ」といふ言葉が非常に不愉快に耳に響くのであつた。

「金なんか問題にすべきものではない。」と自分の心のうちにつぶやいた。さうして金に敬意を拂つてゐる兄の顔にどことなく卑しい影がたゞようてゐるやうに思はれて不愉快で仕方がなかつた。

「醫者は好かない。」と私はにべもなく兄の言葉を遮ぎるやうに返事をするのが常であつた。兄はさういふ時たゞみかけて私の言を反駁するやうなことはしなかつた。たゞ其顔に不満足な色を湛へながらも、まだ思慮の熟さない客氣に驅られた言としてそれほど重きを置かないやうな様子も見えてゐた。

私は年を取るに従つて、とても自分に脊負ひ切れない或る重い負擔が、自分の双肩にかぶさりかゝりつゝあるやうな心持がするのであつた。それは外でもない。子供がない兄弟夫婦はゆく／＼は是非私にたよらねばならぬと考へてゐるらしく、機會がある

毎に兄は私に斯う話すのであつた。

「嫂さんはお前の大小便の世話からして來たので、お前を自分の子供同様に思つてをる。お前も其つもりでゐてもらはねばならぬ。」

私は斯ういふ話を聞く度に、支へることの出來ぬ重い力が私を壓迫して來てゐるやうな心持がするのであつた。それから會て母がひそかに私に斯う話したことがあるのを小耳に挾んで忘れることが出來なかつた。

「清に高濱の跡をとらしたのも、これは高濱家が絶える爲に止むを得ないことであつたとは言ひながら、一つは又池内家の順養子にでもするやうなことになる、うまく行けばえゝけれども、うまく行かない時は却つて他人の養子よりも具合の悪いことになる。それで清は高濱の家を継ぎ、外の二人の兄弟は分家さへして置けば池内家は絶えるやうなことはない。それで他人の養子が好ましくなければ、三人の兄弟のうちの男の子を育て、後を譲るやうにしてもえゝわけである。とさういつてお父さんは話し

兄

ておいでた。」と斯ういふ話であつた。其話を聞いた時、私は兄夫婦が考へてゐるやうな池内家を繼承すべき義務は、高濱家を繼いだことによつて、最早私には解除されたものであるといふやうな考をもつてゐた。

これから志を立て、都會に出て行つて何者にかならねばならぬといふ、燃えたつやうな、然しながら確かな當てのない名譽心に驅られてゐた私は、池内家繼承といふやうな自分に不適當な任務を負ふことには非常な苦痛を感じざるを得なかつたのである。

けれども目の當り兄に向つて、それは私の任務でないから御免を蒙る、とはいへなかつた。又父の意見が斯くくである、といふことを其儘述べる勇氣もなかつた。それで私は兩方の膝を突き合はせてかしまつて坐つたまゝで、たゞ、

「えゝく」と頷くばかりであつた。兄が金まうけをせなければいかぬといふ話も、

一つは此事に關連して一層不愉快に感ぜられるのであつた。

私の卑怯な心は、人から望みを囁かれて一種の責任が重大になりつゝあると考へる

時は、忽ちもがいてそれを逃れようとするやうな傾きがある。後年道灌山で子規居士の依託に背いたのも、斯ういふ心の働きも手傳つてゐる。其他例を擧ぐれば、私の過去の歴史のうちこれに似よつたことが少くない。さうして其結果はどうかといふと、何時の間にか矢張りそれ等の人の考へ通り、自分は或點まで其地位に立つてゐるのであつて、いくらもがいて逃れようとしても、それは終に逃れ得られるものでないばかりか、年をとるに従つて自分自身の方から相當に責務を感じて進んでこれに當るやうになるのであるが、その當時の臆病な心持はとても自分に堪へられない重大事件である如き心のをゝきを覺えてたゞ一圖にこれを振り放さうとするのであつた。私の方がさういふ心持でゐると同時に、兄の方は又、放つて置きさへすれば厭でも應でもゆくゆく此者は其地位に立たねばならぬものになるのであるといふ、先を見据ゑたやうな放膽な考を持つことが出来ないで、どうかして私の口から、

「兄さんの仰しやることを確かに引受けた。」といふ證左をとつて、その氣の細い正直

な心に安心を得たいのであつた。それで兄は何か機会を見出す度に繰返してそれを言つた。私は其度に堅くなつて煮え切らぬ返事をした。さういふ月日が重なるうちに、私は文學に興味を見出して文學者に成らうといふ決心を固くした。

「醫者にならぬか、何といつても醫者が一番金儲けがえ。」と兄は尙ほ其言葉を繰返してゐる時に、私は終に、

「文學者になる積りだ。」と斷言した。兄は相變らず金錢を卑しめるやうな傾向を持つてゐる私に憐らなかつたけれども、而も兎も角も高等中學を経て大學に行かうといふ決心を持つてゐる私の前途に囑望して、強ひてこの文學志望といふことを遮らうとはしなかつた。それは私の學校の成績がそれほど悪くはなくつて、又自分から進んで相當に勉強する氣があるのに安心して自分の家門から兎も角學士を出すやうになるのであるといふ上に大なる希望を繋いでゐたのであつた。さうして私は漸く文學書を耽讀しはじめて、それを買ふのに學校の書物を買ふ以外の費用を要するやうになつたこと

にも、格別不平は言はなかつた。たゞ兄の見て無駄なものとするボールとかバットとかいふやうなものを買ふことに向つては決して許諾を與へなかつた。又字彙や參考書の類でも、私の同級生の多くのものより豊富であるとは決して言へなかつた。私は中學の一年の時から五年の時までたゞ一つの帽子ほか買はなかつた。五年の時には帽子の周圍が擦り切れて心になつてゐる竹が現はれてゐた。又た朝の食膳は一匙の白味噌ですますべきものであるといふやうな考をいつまでも持つてゐた。

私が中學を卒業する一年前に、父は不治の病にとつつかれた。それは胃痛であつた。どの醫者が診て投薬しても胃の疼痛は減せぬばかりか衰弱はいよ／＼加はるばかりであつた。勤める人があつて、或日髪を長く延ばした體格の立派な易者のやうな男が父の病牀にやつて來た。どの醫者にも見放された病をどうかして治したいといふ兄の希望は試に此男を引き入れてみたのであつた。それは胃の患部に吸玉すひたまをかけるのであつて、如何なる難病も此吸玉をかけさへすれば早晚必ず全治するといふのが、其男の

主張であつた。現に其男を紹介した人は、其吸玉で癒つた病人が二三人あると附け加へたのであつた。初めの日其男の歸つた後で父は、

「どうも後の心持がえゝやうだ。」と言つた。それに力を得た家人は次の日から其髪の長い男を歓迎した。髪の長い男は非常に冴えた手つきで吸玉をかけた。四五日経過するうち、

「どうもえゝやうな心持がする」と父は又言つた。其うち髪の長い男は斯ういふ請求を兄に持ち出した。

「まだ此地に来て日が浅いので人々の信用を得ることが難しい。斯ういふ職業についてゐるものは人の信用を得ることは大事なことである。それには宿屋に陣取つて客を引見する時に大きな美しい座布團を敷いてゐる必要がある。それを一つ拵へてもらへまいか。」と斯ういふ希望であつた。

それは稍々腑に落ちかねる申條であつたけれども、父は此男に信用を繋いでゐて多

少の慰安ともなつてゐる様子だし、今此男の希望を卻けてその機嫌を損ずることは出来難い事情になつてゐたので、兄はそれを承諾した。嫂の手でメリンスの赤い大きな座布團を拵へあげたのは間もないことであつた。髪の長い男は之を敷いて土地の人の信用を博さうとした。併し乍ら父は遂に、

「どうも矢張り駄目のやうだ。」とやゝ不安の念を其の吸玉の上に抱きはじめた。けれどもどの醫者にかゝつても効果の見えないことに絶望してゐた父は、矢張り此髪の長い男の上に強ひて慰安を見出さうとつとめてゐた。が、丁度其頃であつた。初め此男は、醫者の免状を持つてゐて然も吸玉をかけるものであるといふ話であつたのが、それは偽りであつて、彼は醫者の免状を持つてゐるものでないといふことが明になつた。兄は非常に怒つた。其日やつて來た男を捉へて兄は直ちに其偽りを面責した。それから、「貴方のやうな虚偽を言ふ人に大事な病人を任かして置いたとは私の不明であつた。然しながら世間に同じやうな迷ひを抱く人もあるかもしれぬから、私はこれから貴郎



を警察に同道して警官の前で貴郎の辯明を訊くことにする」と言つた。兄の眉間にはいつもより深い皺がたゞまれて其聲は怒りの爲に震へてゐた。髪の高い男は顔色を眞ツ蒼にして一言も答へなかつたが逃げるやうに歸つて行つた。父は、

「あの男をあんなに怒らして歸してしまつて、それでおれの病氣をどうする積りだ。」と兄に詰問した。兄は、

「院長に診てもらふ」と興奮して言つた。

「其院長がおれの病には駄目なのではないか。」と父の聲は沈んだ。そこに集まつて坐つてゐた家族の者の間に暫くの間悲しい沈黙が続いた。

後年になつて——それも今から五六年前のことであつた。——私は兄と一緒に東海道に汽車に乗つてゐたが、其時兄は次のやうな事を話した。それは三等室の人のぎつしり詰まつた間に僅に座席を見出して、私と兄とは膝を並べて窓の方を向いて坐つて私の家から持つて來た折詰の鮭をつまみながら、同じく瓶につめて來た冷い酒を二人

で盃に注いで嘗めながら、互に昔の回顧談をしつゝあつたのである。兄は終生決して二等の汽車には乗らなかつた。如何なる場合でも必ず三等車に乗つた。

「あのお父さんの病氣の時分が、あしも一番苦しい時であつた。どうかしてお父さんに綿の厚い敷布団を一枚拵へてあげたいと思つたが、それが出来なかつた。借金をするといふことは昔からあしには出来なんだ。長く寝ておいでた爲に脊中が痛むらしいので、せめて脊中に當る所だけと思ふて、そこに敷くだけのものを拵へてあげた。あげた當座は、あゝこれで樂になつたと大變お悦びだが、暫くしてから、折角拵へて呉れたのちやが矢張りそこばかりが高くなるやうで具合が悪い、除けてくれぬか、との話であつたので、それもやめてしまつた。あの時分の事を考へると、今あし等が厚い布団を敷いて寝たりするのは勿體ない譯ぢや。」

兄はさう話しながら鼻を噉つて盃に口をつけた。其の頃兄の敷いてゐる厚い布団といふのが、私の敷いてゐる布団に較べては遙かに薄いものであつた。私は其の時、著

しく白髪が増して、元來瘦せて長い顔の一層瘦せて長くなつてゐる兄の顔をしみじみと見まもつた。さうして父の運命、兄の運命、又私の運命を考へずにはゐられなかつた。

私が高等學校に遊學してゐる間の兄の家庭には別にこれといふ變つた出来事も無かつた。兄は何の變化もなしに舊藩侯の松山の邸につとめてゐた。母は父の墓參をする外は、歌を詠んだり人に誘はれて芝居を見に行つたりして其日々々を暮してゐた、さうして他郷にある末子の消息を何よりも楽しみに待つてゐた。兄も亦た郷を出で、學窓にいそしんでゐる末弟の消息を何よりも心にかけて待つてゐた。その冬休みの初めての歸省は、家を擧げて待ち設けてゐた。私が、笈を負うて郷關を出づ、というたやうな心持で母兄の膝下を離れたのは八月の末で、もう其年の十二月に歸省したのであるから、その膝下を離れてゐる間といふものは誠に瞬く間であつただけけれども、兎に角末つ子として何時迄も子供らしく取扱はれたものが、初めて暫く他人の膝下にあ

つて、さうして今度初めて歸省するのであつたから、其當人にも、亦たこれを待ち設けてゐるものにも、其後の度々の歸省には味はふことの出来ぬ懐しさと期待とがあつた。母にしても兄にしても、今迄見ることの出来なかつた白い筋の三筋這入つてゐる制帽を被つて、同じく學校のしるしのついてゐる金めつきのボタンをはめた洋服を着て歸つた學生を見た時には、其ものゝ前途にぶら下つてゐる位置、名譽、幸福といふやうなものに對して心の躍ることを禁ずることが出来なかつたのである。その頃私の受取る學資は十圓餘りのものであつて、その中の半ば以上は次兄が之を支出して呉れるのであつたけれども、それにしても舊藩侯の用人として其頃貰つてゐる兄の俸給は十五圓位のものであつたかと想像するのであるが、其中から四五圓の學資を出すことは決して容易なことではなかつたのである。けれども一家の希望が總てこの一青年の上にかゝつてゐる以上、それを苦痛と思ふ考は兄にとつて毛頭無かつたのである。父の死後、どこか喪心したところがあるやうに見えてゐた母は、疊を踏む足音も定かな

らぬやうな様子で初めての歸省子を迎へて呉れた。兄は少し眼に涙をためて私の制服姿を見詰めた。私は稍々得意になつて、今街上で多くの兵隊が私に擧手の禮をしたことを話して笑つた。

「成程お前のやうな服装をして居るものは松山の學校にはないから、士官と間違へたのだらう。」といつて折節來合はせてみた三兄も笑つた。兄は自分の家計の苦しいことなどは一言も私には言はなかつた。又た「醫者にならんか。」といふやうなことも最早一言も言はなかつた。

池内家の總ての希望が私一人に繋がつてゐるやうな楽しい平和な冬休みが殆んど過ぎ去つて、再び比叡山下の學窓に足を向けようとした時に、兄は別盃を酌みながら涙をためた眼を私に向けて、

「あしも嫂<sup>あせ</sup>さんも、たゞお前の成業するのを何より楽しみにして待つてゐるのだ。」と言つた。何の拘束もない夢のやうな希望の中に冬の休日を通してゐた私は、出發間際

に聞かされた此兄の一言で楽しい夢から呼び覺まされたやうな心持がした。ともすれば肩にあることを忘れ勝であつた重荷が、俄かに重力を増して私を地上に壓しつけようとするやうな心持がした。私は何時ものやうに堅くなつてはつきりした返事をしなかつた。

翌年の夏休みも亦歸省した。その二度目の歸省は、最初の歸省ほどに愉快とは思はなかつた。さうして兄を初め一同が私に繋いでゐる希望の大きいことをだん／＼明かに意識して來れば來るほど其苦痛は増すばかりであつた。殊に美人を天の一方に望んでゐる文學の天地は、脊中に羽の生えてゐる子供が自由に大空を飛び廻つてゐるやうな拘束のない天地であつた。その理想の天地と、此現實の家庭とは餘りに多く懸け離れてゐて、それを併せ考へることに堪へ難い苦痛があつた。私は其翌年の春には月の瀬のあたりで催さるゝといふ發火演習に缺席して、單身で東京に遊びに行つた。これは心細いやうな無謀なやうな企であつたが、今迄に自分で量り知ることの出來なかつ

た自分の勇氣を試めし得たやうな心持がした。私が兄にも相談せずには保證人に迫つて退學届に捺印して貰つたことは、それから間もないことであつた。此思ひもよらぬ報告が如何に希望を私一身の上に繋いでゐた兄を失望させたかといふことは想像に餘りあることである。私は流石に兄には手紙を出しかねて次兄の方に其事を通じてやつた。私の決心の堅いことを認めた次兄が、其の私の手紙をもつて兄を訪うた時に、兄は感極はまつて無言のままに只涙をぼろ／＼と膝の上に落すのみであつたといふことである。が、其上<sup>うへ</sup>り兄から私によこした手紙は極めて穩かな手紙であつて、それほどに前が思ひ込んでゐるものなれば仕方がない、此上はその一念を通すやうに十分勉強してみるのがよからう、といふやうな意味の手紙であつた。それから今迄十圓餘りの金を送つてゐたけれども、今後は減額して其半額にする、これで一時を凌いでゐて、自分の希望通り一日も早く自活の道に就くやうにしろ、とさういふことも書き加へてあつた。その手紙に稍々絶望の響きの籠つてゐたことが、甚だしく私を悲しませたと同時に

に、又今迄の私の兩肩にかぶさりかゝつてゐた重荷の幾分を漸く輕からしめ得たやうな氣樂さをも覺えるのであつた。私の當初の考は、學校を退くと同時に直ちに自活の道に入つて、少しも兄達の厄介にならぬやうにしたいといふのであつたが、然しそれは實行の出来ない空想であつた。私はその兄から月々送つて貰ふ若干圓で漸く下宿屋なぞの拂ひを濟ませて、暫くの間不自由な月日を送つてゐた。

兄が大病だから是非歸つて來いといふ電報は、それから一年も経たぬうちに私の許へ届いて來た。私を取り敢へず國に歸つた時に、玄關に私を迎へに出るものは一人もなかつた。それはこの不孝の兒を見捨てたといふ意味では決してなかつた。兄の大病は嫂の手を全く塞いでゐる上に、年と共に老い朽ちて行く母は、この不幸な出來事に只うろ／＼として病室を出たり這入つたりしてゐるばかりであつた。そこで私が兄の病室へ這入つて行つた時に嫂も母も始めて私を認めて、

「まアよく歸つて來てお呉れた。」と聲を揃へて言つた。それから母は私の袖を引いて

次の間へ連れて行つておろくした聲で言つた。

「お醫者さんがいかんとお言ふのに兄さんは強ひて漬菜を食べるとお言ひて、今あたし等がとめてもお聞きいで困つてをるところぢや。お前早くとめてお呉れ。」

母は久し振りに東京から歸つて來た私を迎へる心持よりも、窒扶斯でありながら強ひて漬菜を食はうといふ兄の方の騒ぎに心をとられてしまつてゐた。私は再び病室に這入つてみると、嫂が争つて止めてゐるのを聞かずに兄は丁度漬菜を口に持つて行かうとしてゐるところであつた。私は今迄に覺えないほど落着いた、さうして嚴肅な心持になつて言つた。

「兄さん、それを食べることはお止めた方がよからう。」

兄は熱にうるんだ眼をあげて私の方をちつと見たが、暫く經つて斯う言つた。

「さうか、お前がそんなに止めるのならやめよう。」

さう言つて兄は素直にそれを止めた。兄の眼には涙が溜まつてゐるやうに見えた。

暫くして、

「お前は何うして歸つて來たのか。」と稍々詰問するやうに言つた。私は新聞社の用事で廣島迄來たついでに一寸歸省したのだ、と嘘を言つた。尤も其頃私は或新聞に少しばかり關係は持つてゐたけれども、其爲め廣島へ來たといふことは全くの造りことであつた。兄は高い熱に浮かされながらも、既に新聞社の用事で廣島あたりに出張するやうにまでなつたかと、やゝ晴れやかな顔をして私を見た。

其時の兄の病氣の介抱は嫂と私と二人でした。病氣がよくなつてからも、兄は私の無斷退校に就いては一言も言はなかつた。さうして從來しばしば繰り返したやうな、醫者にならぬか、といふことも、お前を便りにしてゐる、といふことも一言も言はなかつた。たゞ嫂の言ふことも母の言ふことも、又友人の醫者の言ふことすらもきかない場合にも、私の言ふことは直ぐきいた。

其頃家の經濟がどんな風になつてゐるかといふことも兄は私に話さなかつた。けれ

兄

ども後になつて兄が話したやうに、父の死ぬる頃は最も苦しい時代であるとするならば、其頃は稍々苦痛が少かつたのかも知れなかつた。欄間に掛けてある額も、床の間にかゝつてゐる掛地も、依然として昔の通りのものであつたが、それでも隣に住んでゐた人が立ち退くと同時に、其地面を買ひ入れたりなどして少しづつ家の圍ひの廣さを増していつた。

兄の病氣が全快してから私は又東京に出て来て間もなく家庭を作つた。兄は私の爲に如何なる嫁を探さうか、さうしてその嫁を兄夫婦の手で如何に仕込まうかといふやうなことを考へてゐたかどうか。それは私の知らぬところであつた。然しながら私が東京で家庭を作つたといふことは、兄の何等かの考に裏切つたものに相違なかつた。其時の兄の憤怒も私が學校を止した時と同様であつたといふことは、後に次兄の話すところであつた。然し其時又兄が私によこした手紙は極めて穏かなものであつて、私を尤めるやうな口吻は少しも無かつた。

それから殆んど一年目に、今度は母の病氣の爲めに私は又國へ歸らねばならぬことになつた。それから母の希望だといふので、私は妻と生れたばかりの子供を連れて歸ることになつた。母の病氣は心臓の故障であつて、顔や手足に水を持つたかと思ふと又引いたりなぞして、良い方とも悪い方ともつかぬ様子で何箇月か経過した。赤ン坊は大分成人して、母の起き返つてゐる布団の上に寝かされて手足をばた／＼させてゐた。母はそれを見て毎日の病苦を忘れてゐるやうであつた。

兄がこの幼い子供を見る眼は、私の母が見る目とは大分異つてゐたに相違なかつた。母は私が傍にゐるといふことだけで既に大なる慰藉を得てゐた。その妻が如何なる妻であるか、その子供が如何なる子供であるか、といふことすらも考へる暇がなく、それが自分の熱愛する末つ子の妻であり子であると考へるだけで、もう無上の満足を感じるのであつた。兄の心持はそれとは餘程異つてゐた。兄は初め、その意志通りに發達して行くべき柔順な小羊と私を考へてゐた。兄は其理想通り私を醫者にして、金に

不自由をしない人間に仕立上げようと考へてゐた。けれどもその小羊はなかく言ふことを聞かなかつた。兄は此の小羊の、文學を志望して高等中學を経て大學に行くといふ希望に就ては、それほど賛成ではなかつたけれども尙それは我慢の出来る程度のものであつた。けれども勝手に學校を止して、一本の筆で自活の道をたてるといふに至つては最早我慢がし切れない我慢であつた。けれども勝手に自分で柵を乗り越えて荒野にさまよひ出た小羊を、兄一人の力ではどうすることも出来なかつた。兄はその我慢がし切れないことまでも遂にあきらめるより外に仕方がなかつたのであつた。けれども尙ほ、その小羊が作る家庭は自分に親しい情味のあるものにしたといふ考を最後の希望として持つてゐた。が、一度び曠野にさ迷ひ出た羊はその家庭を作る上に於ても決して兄の意志を測量しようとはしなかつた。今迄小羊と思つてゐたのは小羊ではなくつて、自分の手におへない極めて我慢な野獣であつたことを兄は漸くにして悟り得たのであつた。ほんとうの子供を持たない心細さはどこまでも兄の氣を弱く

して、この野獣が尙ほ小羊であるのかもしれない、といふやうな未練はいつまでも残つてゐたのであるが、それにしても目のあたりにその自分の意志に背いた若い女や小さな子供のあることは、決して愉快なものでなかつたに相違ない。赤ん坊は何も知らずに唯だ玩具を口に持つて行つたり手足をばたくさせたりして母の病床の上に嬉々として遊んでゐた。

私は母の介抱に歸省する三四ヶ月前に二十圓の給料を貰つて或新聞社に遣入つてゐた。が、歸省してから百日にもなつたので、私はその社から「記者席削除」といふことを申渡された。私もはじめから其社に長くゐる考はなかつたので、今度歸京したならば自分で雑誌を發行してみようといふ考を豫ねてから持つてゐた。私は遂に其計畫を兄に話した時、兄は暫く熟考してゐたが、

「見込さへあればやつてみるがよからう。」と言つた。さうして資金として三百圓の金を貸して呉れることになつた。

母の病氣はいつまで経つても大した變化がなかつたので私は終に妻を連れて其三百圓の金を懐にして東京に歸つて來た。さうして翌月から其金の利子を兄の方に送つた。

私其雜誌で衣食するといふことは當分樂なことではなかつた。金に不足を生じた時に私は又兄に送金を申込んだこともあつた。もとよりその金の利子も前の金の利子に併せて兄の許に送つた。その後或事で私の手許に二千圓ばかりの金が纏まつて這入つたことがあつた。私は其金を兄の手許に送つた。今迄の兄からの負債を償却した上に尙若干の剩餘金があつたので、兄はその金を其の手許に保管することにして規則正しい預り證を送つてよこした。そして毎月その金に今度は兄の方から利子をつけて呉れることにした。その頃私の家庭はもう子供が三人に殖えて一家の經濟も膨脹してゐた。折節上京して來た兄は、兎も角私が自分の力で生活をたてゝゐることに満足はしてゐたが、何故に今少し家政を引締めて貯蓄に志さぬかといふことを不満足に思つてゐた。折角上京して來たのだから芝居に案内しようと思つて私は之を勧めたが兄は容

易に承知しなかつた。けれども漸く話がまとまつて歌舞伎座の土間に陣取つて十圓札を出して拂ひをした時に、兄の眉間には不愉快な皺が疊まれてゐた。それよりも折節東京に揃つた兄弟四人が淺草の公園に散歩して、その安西洋料理屋に上つてオムレツを一皿づゝ食つた時には絶大の満足を感じたらしい顔つきであつた。私のうちへ泊つてゐる間、その食物の調理は頗る家内のものを苦しめたといふのは鹽加減などが八釜しいといふのではなく、これ／＼の二皿さへあれば十分だと思ふ副食物が、更に今一皿餘分についてゐるのを見た時などに、その食物に味を感じぬ位に不愉快な思ひを兄はするらしく、それかと言つて又二皿はあるべきが至當だと考へる場合に一皿ほかなかつたといふやうな時も同じく兄の顔色は冴えなかつた。即ち兄が考へて丁度ほどよいと思ふつぼにはまつてゐた時は非常に機嫌がよく、少しでもそのつぼを外れてゐた時は機嫌が悪るかつた。それは今から十二三年前の丁度兄が五十位の年配の頃であつた。



「どうも此頃兄さんは前よりも餘計に氣難しくなつて來たやうだ。年の勢かしらん。」など、私は家族のものと話した。

東京に來て居つた三兄が赤十字社病院で死んだのもその頃であつた。その遺孤の二人の女の子は兄が國許へ引取つて世話をすることになつた。その二人の女の子は兄と嫂をお父さん、お母さんと呼んでゐた。

その後次兄も東京に出て來て國許には兄一人が留まつてゐた。旅行のついでなどに私が歸省することがあると兄は非常に喜んだ。

「お前も都合がえ、し、中兄さんなかにいも上京後順序がついて來たやうだし、それとく安心ぢやが可哀相なのは小兄さんであつた。志を得ずに貧乏をしてしまつたのは心残りぢやけれど、どうも致し方がない。まア此二人の子を斯うやつて世話をしてやつてゐるのが死んだ小兄さんへの志ぢや。」とさういつて兄は涙ぐむだ目で二人の女の子を見た。その頃の兄の手許の財政もそれほど苦しくはなさうであつた。その頃兄は舊藩侯の

別邸の中に留守番旁々住まつてゐた。私が車屋に皮靴を持たせて行く石段の左右には紅梅が美しく咲いてゐた。

此頃池内家の後繼ぎをどうするかといふ考へはまだ確かに決まつてゐるやうに見えなかつた。けれども或時の話に、

「嫂さんが言ふのは、どうしても小さい時から大小便の面倒をみて育てたお前が一番心がおけいで、自分の子も同様に思へる、と云うて居る。あしが死んだ後は矢張お前が面倒を見てやつてくれねばなるまいと思ふ。」と思ひつめたやうにさう言つた。それは十年以前まで度々聞いた言葉と同じ言葉であつたけれども、然しそれを受取る私の心持は非常に變つてゐた。私は顔を上げてはつきりと答へた。

「それは無論あしの責任と思つとる。あしにしても小さい時から世話になつた嫂さんのことであるから少しも隔てといふものはない。嫂さんの方でも同じことであらう。併しそんなことを言つて置いてあしの方が兄さんより先きに死ぬるかもしれんて

い。」とさう言つて私は笑つた。

「たまらんく。小兄さんが大勢の子供を残して死んだ上に、お前が又大勢の子供を残して死んでくれてはあしはたまらんぞい。」

傍らに聞いてゐた嫂も、

「これで清さんに先きに死なれたら、兄さんは直ぐ後を逐うて死んでお終ひるぞな。」

さう話合つて三人は大きな聲をして笑つた。然し三人の眼にはそれぐ涙があつた。私の四番目の子が男の子であつて、長男のほかは次男を得たことは私に一つの決心を促した。其は池内家の後を相續することは此男の子の生れついた責任であると考えたのであつた。私は早速兄に名前をつけることを頼んでやつた。兄は祖父と父との幼名であつた「友次郎」といふ名を選択して送つて來た。其時私は手紙の中に、此次男を池内家の養嗣子にするといふ私の意見を言つてやつた。兄はそれに異存のないことを書き添へて來た。

其次に歸省した時に、兄はその財産の名目の書きあげてある帳面を私に見せた。それから自分の死後はそのうちの凡そ三分の一弱に當るものを嫂に與へることにせうと思ふが異論はないかと言つた。私は少しも異論はない、そんなことは總て兄さんの考へ通りになさるがよからう、と言つた。兄は其帳面を繰りひろげながら、

「それでも殆んど財産といふものゝ無かつた池内家に、大した財産といふではないけれども、兎も角これ位なものを作つたのは豪いだらう。」とさう言つて聲を出して笑つた。それから又言葉をついで言つた。

「お前も此頃月々金を送つて來るので、可なりな貯蓄が出來たけれども、まだあしの財産の方が、お前よりは多いよ。まだ負けてはゐないよ。」とさう言つて兄は又愉快さうに笑つた。兄は極めて畫の正しい文字で、古風な日本紙の野紙の帳面に詳細な財産の記録を作つてゐるのであつた。私は一寸見て目まぐるしいほどの感じのものであつたが、其後私が歸省してみる度に其帳面はいつも新しいものに書き革めてあつた。さ

うして兄は必ず其帳面を私の前に置いて、現在の財政の状態を説明して聞かすのであつた。父の經濟を受けついで以後、三十餘年間の兄の努力は凝つて此帳面の上にあるのだといふことを私は其帳面を見ながらしみじみと感した。

さういふ時に當つて思ひもよらぬ大きな打撃が兄の上に来た。といふのは外でもなく、嫂の實家と關係のある一軒の酒屋が破産をして、そこに金を用立て、居つた兄は、一部の損失を負擔しなければならぬことになつたのであつた。それは兄にとつては容易ならざる出來事であつた。この頃健康の十分でなかつた身體を振り起して兄は善後策に奔走した。兄は其込み入つた事情や、善後策に就いて私に話したけれども、私は半分も其話を理解しなかつた。どうかして兄の大損失にならねばよいかと唯其を考へるだけのことであつた。定めて兄にとつては力にならぬ臍甲斐ない相談相手であつたらう。その後になつて此の紛争は或點まで落着いたといふ話は聞いたけれども、それがどれほどに落着いたのか、折角兄が、お前の貯金よりもまだ餘計だといつて戯談半

分に威張つたその財産に、少なからぬ缺損を見たことは、なか／＼容易に恢復され得べきことではなからうと私は氣の毒に思ふのであつた。その私の貯金といふのも一時賣れなくなつた雑誌を恢復する爲めに、數回兄の手許に送金を要求してやつて、それはもう極めて残り少ななものになつてゐた。國に歸る度に兄は、

「その後はこちらから送金するばかりで、お前の方からはちつとも送金してよこさぬが、少しも餘裕は生じないのかい。」と不平さうに言つた。父から僅かに八十圓の金を受取つて、それで一家の經濟を擔當せなければならなかつた兄は、自分ばかりでなく、自分の兄弟はもとよりのこと、自分に親しい人々の財産ですらも、少しづつでも順境に向つて行くことを無上の快樂としてゐた。兄が金錢の世話をしてみた家は二三年前までは五六軒もあつた。たゞ晩年になつて、その世話に堪へぬからと言つて大方斷つてしまつた、と兄は言つた。

その後も兄は年に一度か、隔年に一度位は上京して來た。國には親戚らしい親戚も

なく、その舊友もだん／＼死に減つて話相手になるものも少くなつたので、年に一度、もしくは隔年に一度上京して来て二人の弟に遇ふことを何よりも樂みとしてゐた。年をとるに従つて健康も十分でないらしいので、汽車を二等にするか、途中で一泊するかして、からだ身體に無理をせぬやうに、といろ／＼勸告をしたが、兄は決して聽かなかつた。松山を出てから東京に着くまで一晝夜以上を汽車や船に乗りづめにして、而も汽車は必ず三等にするのであつた。それから東京に来て、物見遊山のやうなことは、以前よりも益々好まぬ傾向になつてゐた。芝居などは幾ら勸めても行かうとは言はなかつた。或時次兄が國技館の菊を見に連れて行つたことがあつた。それは比較的安い見料で美しい菊や、巧みな菊細工などを見ることが出来たので非常に氣に入つたやうであつた。又た或時は四谷の左門町に人を訪ねるといふので私はその供をして出かけた。電車に乗らうとしたら兄は天氣もいゝからそろ／＼歩かうといつた。四谷見附に出た頃もう十二時に近く私は空腹を覺えたので、

「こゝに三河屋といふ有名な牛肉屋がある。午飯を食はう。」と私は言つた。兄は思ひもよらぬことだといふやうな顔をして首を振つた。

「馬鹿なこと、牛肉などゝそんな驕りがましいことをせいでもえゝ。どこかそこらにもつと簡単に飯を食ふ所がありさうなものだ。」

さういつてさつ／＼と先きに立つて歩いた。牛肉屋で飯を食ふとを贅澤なことと思つてゐなかつた私は此兄のけしきばんだ言葉に少なからず驚かされたのであつたが、此場合に黙つてその後にくつ／＼いて行くより外に方法は無かつた。一丁も行つたと思ふ頃、そこに「雑煮しろ」といふ文字の書かれた障子の立つてゐる家があつた。

「しることを一つやつて見ようか。」

さう言つて兄は立止まつた。そのしることを食ふといふことすらが兄にとつては餘程奮發した驕り沙汰であるかのやうに見えた。

「食つてみていゝ。」と私は答へた。

兄

「それではやつてみよう。」と兄は再び奮發するらしい語氣を漏らして二人で障子を明けて中に這入った。印絆纏を着た一人の男が、空になつた椀を二つ三つ前に置いて煙草を吹かしてゐた。

「いらつしやい。」といふ不景氣な女の聲が聞えた。汚い布圍に腰をかけて待つてゐると一杯づゝのしる粉が前に運ばれた。兄は、

「これは鹽梅がえ。」といひ乍ら漆の剝けた椀を取り上げて旨さうにそれを嘔つた。

「もう一杯食べようか。」と兄は私に訊いた。

「口がねばつて仕方がない、今度は雜煮でも食はう。」と私は言つた。

「それちや雜煮をやつて見ようか。」

兄はさう言つて二人は又雜煮を一杯宛食つた。此日はそれで午飯をすませて左門町の或家を訪問して、又とぼくと歩いて私の富士見町の家へ二人で歸つて來た。

酒屋の破産のことがあつてから兄の儉約は前よりも一層烈しくなつた。

「何の爲にそんなに儉約をなさるのですか、譲らうにも後に本統の子供があるではないし、そんなに苦しい念ひをしてお金をためるよりも、元氣な間にそのお金を使うて、もつと面白可笑しく世の中をお渡りになる方がよからうと、さういうても兄さんは中いふことをお聞きゝんのよ。」と嫂は嘆息するやうに言つて笑つた。そばに其嫂の言葉聞いてゐた兄は黙つて何とも言はなかつた。

兄の手許で育てられた三兄の遺孤二人はいづれも成人して年頃の娘になつた。さうして其姉の方の龜子は東京の實母の膝下に歸つてゐたが良縁あつて嫁入をした。妹娘の方の鶴子が珍らしく上京して來た時に私にこんな話をした。

「此頃お父さんとお母さんとの仲が悪うて困るのですよ。それもお母さんがりうまちで手足が自由にならんのでお父さんに不便なことが自然多くなるし、どうしてもお父さんの機嫌が悪いやうになるのです。又お母さんにしても、そのりうまちを治す爲めに道後の温泉に二三日這入つて來たい、とさう仰しやつても、初め一日いらしつた時

に少し歸りが遅かつたといつて、もうお父さんの機嫌がわるかつたりする爲めに、自然二人の間が面白くなるのです。二人とも年をとられて身體からだが悪くなつて來て思ふまゝにならぬ爲め、自然疝癪けんじやくが起つて來るのですよ。子供の無い方かたの年をとつたのは本統に氣の毒だと思ひます。」

友次郎を嗣子として入籍した序でにこれも養女といふ表立つた關係になつた鶴子はそんなことを言つて顔を曇らせた。さうして又斯う言つた。

「それで私が考へるのですが、叔父さん、友ちゃんを松山の方へよこして貰ふことは出來ませんでせうか。二人の間に友ちゃんさへあつたら、それが慰みのたしになつてあんなことはあるまいと思ふのですか……」とさう言つて姪は私の顔を見た。友次郎を松山に呼び寄せるといふことは一番嫂が之を希望して居るらしく、兄もまたそれを望むかの如く、もう一二度私に其話を持出したのであつた。けれども私は十歳前後の子供を實の父母の膝下から離すことを好ましいことに思はなかつた。それが兄夫婦の

慰藉にならうといふことは考へないものでもなかつたが、子供に及ぼす影響を考へるとどうしてもいゝことゝは思はれなかつた。それで其都度私は、

「まだそれは少し早いだらう、もう少し年をとつてからの方がよからう。」と言つて賛成しなかつた。次兄も、

「お前の家庭と兄さんの家庭とは大變な相違だから、急にそんな違つた家庭へ移らす事はよくあるまい。」と言つて賛成しなかつた。そんな事で其話はいつとも立消えになるのであつたが、此姪の話聞いた時に、私は子供の無い老夫婦の冷たい家庭をしみじくと考へさせられるのであつた。けれどもどうも友次郎を其中に差出すといふ考を即決することは出來なかつた。

今年の秋、兄は嫂をつれて上京して來た。其時は東京の私のうちへ親族どもが集まつて質素な御馳走で宴會をした。親族中で一番の長者である兄夫妻を取圍んで寫眞をとつた。又兄を初め家族のもの一同を題として福引を拵へて引いた。其中に兄が國許

で世話をした二人の娘の姉に當る澄子も子供をつれて其席上に居た。其の夫に當る人は外交官として佛蘭西の里昂に行つてゐるので此席上にはゐなかつた。

其時兄に當つた福引は赤い幅の廣い一つのリボンであつて、「お澄さんの心意氣、心はリオン、リオン。」とさう説明してたけしは其リボンを翻しながら兄の所へ持つて行つた。その福引はたけしや五郎の若い仲間であつたものであつた。たけしは次兄の長男で、五郎は鶴子の新婚の夫であつた。

「まアひどいたけさん、覚えてゐらつしやい。」と澄子は怒つた。席上のもものは皆拍手喝采をした。嫂もころげるやうに笑つた。兄も顔の相恰をくづして笑つた。兄がこなに心から愉快さうにして笑つた様子は我等の目に誠に珍らしいことであつた。其時私の家の家族のもものは皆鎌倉から東京に出て來たのであつたが、肝腎の友次郎は生憎病氣であつたので出て來られなかつた。兄は非常にそれを残念がつてわざ／＼夫婦で鎌倉へ來て友次郎を中へ挟んで寫眞をとつたりなどした。鎌倉に來てゐる間友次郎

の寢床は兄夫婦の布團の間に敷かれるのであつた。其間は何事も友次郎々々々と格別に持て囃さるゝので、妹の宵子は不平を壓へることが出来なかつた。

「お國のおちいさんは嫌ひだ。」

彼女は兄の前で唇を尖らせながら斯う言つた。家族のもものは皆笑つた。兄夫婦も友次郎の顔を見乍ら笑つた。

兄は、今年の夏は暑さに負けて大變弱つたが秋になつて大分恢復したといふことを手紙のはしに言つて來た。其時又、嫂のりうまちがいよく烈しくなつて困る、幸ひ夏休みには五郎夫婦が歸省したので鶴子にしばらくの間來てもらつてゐたが、さういつまでも引張つておくわけにゆかないので縁家の方へ歸してしまつた。其後は自分で水まで汲まなければならぬことがあるので大に困るといふやうなことを言つて來た。「兄さんは相變らず下女を置かないでやつておいでなのだらうか。」と私は折節鎌倉に來てゐた次兄に話した。

「さあ、さうかもしれぬ。」と次兄は答へた。私は間もなく女中を置くことをすゝめて六圓の小爲替を封入して送つた。それから、これは友次郎からの贈物と思つてもらひたい、さうして毎月必ず送るからは非女中を置くやうにしてもらひたいといつてやつた。十日も経つて後簡単な受取のハガキが兄から來て、

「千代への見舞は確かに受取つた。委細は手紙で云つてやる。」といふやうな意味のことが書いてあつた。

それから丁度一月目のことであつた。兄の友人から手紙が來て兄の病氣のことを報じて來た。それは肋膜炎で、今のところまだ憂慮すべきほどのところではないが、而も年齢も六十を過ぎてゐるし、平常の健康も十分な方でないから心配でないともいへぬ、経過がよくなかつたら電報を打つから直ぐ歸つて來い、といふ意味のことが認めあつた。私が電報を受取つて國へ歸つたのはそれから二三日のことであつた。病床に私を迎へた兄は左胸部の疼痛に悩んでゐた。痛みに堪へかねて毎夜モルヒネを注射

して漸く眠りにつくのだといふことであつた。兄は多忙な私を呼び寄せることを餘ほど氣兼ねたらしく、その枕元には「イシャトメルカヘルニオヨバヌ」と自身で下書した電報用紙などが置いてあつた。その兄の意向は途中まで出迎へてくれた兄の友人の話で知つてゐたので、私は或る公用のついでに立寄つたのだ、と言つた。それは全くの作りことでもなく事實さういふ用事もあつたのであつた。

「さうかそれはえゝ都合であつた。」と兄は安心したやうに言つた。兄は胸部の疼痛ばかりでなく、口中や鼻孔のたゞれたり、乾燥したりするのに悩んでゐたので、私は其夜吸入器を買ひに松山の市中を歩き廻つた。松山に吸入器を賣つてゐる藥種屋はたゞ一軒ほかないのに驚かされた。

兄は死ぬるものとは考へてゐなかつたやうであつた。それでも此文章の初めに書いたやうに、嫂のことに就いては私に一言話した。死後のことに關して自分から進んで話したのは此一事ばかりであつた。私ははじめ歸省する時に、歸りつくや否や必ずい



つもの帳面を取出して私に説明するであらうと考へてみたが、そんな容子はすこしもなかつた。それよりも、

「斯う病氣の時に前前に遠方を來て貰はねばならぬやうでは困つたことである。今度よくなつたら東京か鎌倉へ行つて住まうことにしようか。」など言つて自分で考へてゐた。私はそれに賛成した。さうして斯う言つた。

「そのかはり東京へお出でたら、もう一生を遊び暮すつもりで周圍のものゝすることが、自分の意見と違つても、それを氣にかけたり怒つたりしないやうにおしんといかんぞな。日曜毎に能を見に行くとか、其他物見遊山で日を暮らすやうにおしんと却つて東京は不愉快なところになるかもしれないぞな。」と言つた。兄は極めて素直に、

「さうとも、さう定まつた以上は其氣になつて遊ぶことにする。」と言つた。これより前東京に移住する考は寧ろ嫂の方に多くあつたのであるが、兄の心も多少動かぬではなかつたやうであつた。けれども私は、兄が僅か一週間や十日間の滞在でも、私初め

周圍のものゝすることが何彼につけて其の意見に反し疝癪の種になるらしいことを知つてゐたので、どちらを振り返つてみても兄と調子の合ふ人は一人もなさうな此の東京に移住するといふことを決して兄にとつて幸福なことゝ考へることは出来なかつた。それで私は餘りその移住説に賛成しなかつた。兄もまた私が杞憂するところを氣にしてゐるらしく、進んで東京に來ようともいはなかつた。

兄の病氣は良い方に赴かず、殊に肺炎を併發したらしく血痰を吐くやうになつた時に、私は兄に入院をすゝめた。初め歸つた時既に一度入院をすゝめたのであつたが、兄はきかなかつた。血痰を見るに至つて兄も意が動いたらしく、終に入院と決した。其時嫂は例の帳面のことを兄に話して、

「清さんに話してお置きになる方がよくはありませぬか。」と言つた。兄は今年になつて又新しく調製した帳面を私に見せて、一言二言話しかけてゐるところへ醫者が來た。「此帳面を見れば萬事分るやうにしてある。」とさう言つて兄は其帳面を私に渡した。

醫者の來たといふこともあつたけれども、一つは病苦の爲めに悉しくそれを話す勇氣がもう兄には無かつたやうであつた。

病院に這入つて後に、兄は突然私に斯ういふことを言つた。

「もう錢のことなんか考へんことにしよう。」

それは入院の費用といふことが兄の頭を悩ましてゐたものと解釋したので、私は打消すやうに言つた。

「さうとも、萬事病氣を治してからの上のことよ。そんなことに氣を配ることは斷然お止し。」とさう言つた。

それから餘り時間も経たないうちに、

「あの小遣帳はどうなつたかしらん、どう考へてみても分らん。頭が滅茶苦茶になつてしまつた。」と救ひをもとめるやうな眼つきをして兄は私を見た。

「小遣帳はあしがつけて居るから安心おし。」と私は答へた。兄の頭は入院する前から

もう餘程變になつてゐたやうで、時々自分の居るところを、どこにゐるのかといつて訊いたりした。殊に入院して後は、東京に居るやうな積りであつたり、又汽車の中にあるやうな積りであつたりした。

「京都から此處までには二つ停車場があつたのか。」など、聞いたりした。兄の病氣は化膿性肋膜炎であつて、その膿の毒素が脳髓を冒しつゝあつたのであることが漸くにして分つて來た。

次兄が介抱の爲め歸國するといふことが分つた時に私はそれを兄に話した。兄は、「さうか、それは大騒ぎになつて來た。」と天井を視詰めて言つた。矢張り池内家全體の經濟問題といふことが、餘程其の頭を悩ましてゐるものゝやうにみえた。

兄は終に死んだ。取残された兄弟二人はいづれも東京に繁忙な用事を持つてゐるので、初七日の法要をすまずと、直ちに用書類を片附けて歸東することにした。綿密な帳面は、兄が病床に打伏す其日までの一錢一厘の收支を落ちなく記録してゐた。私如

き此種の事に迂遠なものにも總ての經濟状態が一目のもとに瞭然である如く記載してあつた。さうして殊に私を驚かしたことは、會つて兄が私に、「兎に角これだけの貯金をしたのはえらいだらう。」とか「お前の財産にはまだ負けないよ。」とか言つて愉快げに戯れた其當時と殆ど同等の金額を其財産簿に記録してゐたことであつた。彼の親戚の酒屋の爲めに蒙つた大きな損害を、兄はどうして癒やしたのであつたらう。兄が自分の身を出來るだけ切りつめて儉約の上に儉約をつとめたことは、全く此損害を填補する一圖の考から出たものであつたことを此の時になつて初めて了解した。私はしみじみとした心でその帳簿をながめつゝ、會て私は自ら之を卑しきも、又世間の多くの人も卑しむべきことゝしてゐる貨殖のことも、此場合少しも卑しい感じが起らぬばかりか、心からこの兄の事業に對して敬意を表せざるを得ないことを悟つた。かの私が九月の初めに送つた六圓の金も、兄は女中の費用には使はずにその爲替を受取つた歸り直ぐ銀行に預けてしまつたやうだと嫂は話した。帳簿には「清より千代へ見舞」

として其はちやんと収入の部についてゐた。

考へて見ると彼の高繩山の麓に狐火のともる夜なく、私等を集めてお伽噺をしてきかせた時代の兄はまだ若かつた。私の知つてゐるだけの兄の生涯でも決して短かゝつたとはいへない。さうしてその生涯を通じて兄は唯だその事業の爲に心を碎いた。その事業といふのは決して華やかな大きな事業ではなかつた。けれどもそれは草木の根が地中に喰ひ込んで行くやうな事業であつた。兄は木の根のやうな人であつた。

(大正五年十二月)

## 一日

東京。

朝起きると障子に日が當つて居る。此家は雨戸の代りにすり硝子の障子をはめてあるので、朝の光は容赦もなくさしこんで来る。夏などは四時頃からもう明るくなつて来るので、一寸眼でもあくともう眠れなくなるなどもある。此頃はそれほど早く白みもしないけれども、それでも普通の家よりは早く明るくなる。朝寢をしようと思ふ時家人に雨戸を明けさゝずに置くといふやうなことが出来ないのは私如きものにとつては却つて不便な場合もある。この朝は更にいつもより遅かつたと見えて障子が一面に明るくなつてゐる上に更に一部分に焔のやうな火のかたまりがぎら／＼と光つて

見える。それは木の間を漏れた光りが硝子戸を通し、障子に直射してゐるので、それを見た瞬間の心持は或る力といふやうなものを覚えて頼もしげな気分になつた。けれどもさういふ心持もまことに瞬間の感じであつて私は寧ろその光りを見まいとして眼を瞑つて再び静かな眠りに這入りたいとつとめた。半醒半睡の状態が暫くつゞいてゐるうちに私の頭には或る問題が考究されつゝあるのであつた。

「この問題は、何うすることも出来ない問題である。」と考へた。その問題といふのは夢の中から糸を引いて来て居るやうな稍々とりとめのつかないものであつたが、それでもどうすることも出来ない問題であると思つた時は、かねて考へてゐる重大問題に觸れたやうな心持がして、

「それは間違ひないことだ。」と心の中で繰り返した。

「要するに解決のつかない問題にわれ等は生涯頭を悩ますのである。數字に割り切れる數と、割り切れぬ數とがあるやうに人事にも解決のつく問題とつかない問題とがあ

る。その解決のつかない問題にぶつゝかつた時に、あの西山泊雲は晝寢をするのだな。」と考へた。銘酒小鼓の醸造元、西山泊雲の容貌を眼の前に描き出して見て私は可笑しくなつた。泊雲は納税期になつて金の徴達が出来ぬと、帳場に坐つて熱心に俳句を作るさうである。それからいよくせつばつまつてもう二三時間で期限が切れるといふやうな時になつて尙ほ工面くめんがつかぬと彼はたうとう酒藏の二階に上つて寢てしまふさうである。此場合時計の針が進むことは、時計の勝手であつて泊雲の關知するところではないのである。

「飲酒は一時の自殺だ。」と誰れかと言つた言葉が又思ひ出された。晝寢も、飲酒も、皆似よつたことである。解決のつかない場合に、もう解決にあせらずに打つちやらかしてしまふのである。それは卑怯だとよく人がいふが、然し解決のつかないものはどこまでもつかないので、いつまでもそれに悩まされてゐるに堪へなくなつた時、人間はその逃げ場所を見出して、そこに一時の安をむさぼるのである。もし片つばしから解

決をつけてゆかなければならんといった日にはわれ等は數限りも知れない大問題の林の前に眼を廻して倒れてしまはねばならぬ。

「仕方がないさ、なるやうになるのだ。」とさういふあきらめの言葉がその場合に一つの道をあけて呉れる。その道を通つてゐるうちに問題の林は後ろになつて、何だか分らぬ乍らに過ぎ去つてしまつた、といふやうなことになるのである。柳は緑花は紅といつたり、諸法實相といつたり、庭前の柏樹子といつたりするのも、畢竟このあきらめに過ぎないのである。いくら考へたつて解決のつかない場合は、一切の念慮を絶つてしまつてたゞ眼の前に現はれ來つたところのものを見るやうになる。

私は又蒲團から顔を出して明るい障子を見た。焔のやうな火のかたまりは、だん／＼擴がつてぎら／＼と障子の紙の上にゆらめいてゐる。

「明るい美しい色だ。」と私はその光りの玉を凝視した。ふと私の心は太古のやうな静かさを覺えた。今迄明るかつた日の光は一層明るくなつて、其のぎら／＼とする焔の

玉は、生れてから未だ會つて見たことのない美しさになつた。

「大歡喜心といふのは、かういふ心持であらう。」と私は心の中でつぶやいた。

電話のベルの音が響いて聽て話をして居る中に、私の名前が聞こえる。ふとその方に耳を傾けかけると雲が太陽の面を通過した時と同じやうに障子の光りの明るさが褪せて、焔の玉もだん／＼と光りを減じて來た。電話は私がまだ眠つてゐるといふことで、その儘切れてしまつたやうである。

「もう起きなければならぬ。」と思つて、私は四邊の物音に耳を傾けた。そこには今まで聞こえてゐなかつたさまざま／＼な物音が響いてゐた。姿勢を正しい仰臥にかへて見渡した天井も、欄間も、長押も、鴨居も、皆光りのない古びた色であつた。床にかゝつてゐる掛け地は支那のどこかにあるといふ達磨の像の石摺りで、その達磨といふのが禪宗坊主などの書いた繪で見なれた顔とは大分變つてゐて、殆ど西洋人かと思はれるやうな顔であつた。達磨が印度から來たとすれば、この顔がほんとうの顔である筈

だ。もと／＼この印度人の顔であつたものが、支那や日本人の筆者によつて、だんだん變化されたものが今日の煙草屋の看板や、風繪にまでなつた例の達磨大師の顔であらう。

その上の壁間には子規庵保存寄附金の記念品として配布した子規居士の自畫讃を印刷した木版摺と、子規居士自筆の「俳句分類」中の時鳥の部の一枚とを並べて貼つた額が懸かつて居る。よく來る人が此繪を見て旨いといつて褒めるけれども、私は子規居士の繪は餘り好かない。「コ、アを持つて來い、鹽煎餅を持つて來い……」など、其繪の上にかいてある文句も餘り面白いと思はない。それは是等の繪や文句から想像する居士の病苦が、私には餘り生ま／＼しくつて恰度遊就館にある血痕のついた戎衣が其遺族に與へる感じと同じやうな感じを私に與へるが爲めである。然し之を額にして楣間にかゝげたといふのは、子規庵保存といふことは主として碧梧桐が發起もし斡旋もしたこともあるけれども、我等が共同責任を負うた仕事であるといふところから、其

まゝ反古にする氣にもならず、額にでもして置かうと思つて額にして、さて額になつて見ると、どこかに懸けねばならぬので、こゝにかけたといつたやうな次第である。あの當時碧梧桐は旅から歸つて咄嗟の間に子規庵保存といふことをわれ等仲間提議したので、それは悪いことでないと思つて私も賛成を表した一人であつたのであるが、此頃考へて見ると、子規庵保存といふやうなことはそれほど大切なことでも無かつたやうな氣持がするのである。

「子規庵が無くなつてしまつたところで、それがどうしたといふのか。」といふやうな力強い聲がどこからか響いて來る。子規庵を保存したいと言ふわれ等の努力は「總てのものが亡びて行くのだ。」と言ふ大きな事實の前には、餘りにはかない小さい希望であることが癪に障るやうな氣持がする。けれども保存するのが悪いと言ふ理由はどこにもない。先づ結構なことゝして置くべきであらう。

其他には蕪村の几董に宛てた手紙や、滴水禪師の「萬物修乎我」と書いたものなどが

額になつて居るが、それも人から貰つたものを懸けたといふ支けで餘り私の心をひかない。殊に蕪村の書翰などは面白くも可笑しくもない。それ等よりも却つて私の興をひくのは長押しに無造作に挿んである澤山の寫眞である。それは多く俳句會などの時に撮つた寫眞で私を中心にして澤山の若い人が寫つてゐるのである。私はどこの俳句會に行つても一番の年少者であつた二十四五年前を回想する。私はどこへ行くのでも子規居士の後にいつて行つた。さうして子規居士の言ふなりになつてゐた。子規居士がいゝといへばいゝのだと思つた。その時分が一番楽しかつた。暫くしてから子規居士のいゝといふことが私のいゝと思ふことゝ違ふやうになり、子規居士の嫌ひといふことが、私の嫌ひと思ふことゝ一致せぬ様になつた時は心に曇りが生じて來た。其時には私は既に年少者でなく、私の後には澤山の若い人が居た。けれども子規居士の生存中は、自分がいゝと思ふことでも居士が悪いといつた以上、悪いことに相場が決まつてしまつた。私が悪いと思つたことでも、居士がいゝといつた以上、いゝことに相場が決つ

て了つた。それは多少心に曇りを誘ふ原因にはなつても尙ほわれ等仲間には頼りどころがあつた。皆が安心して居士のいふことを聞く爲めに、私も矢張その安心者の一人であることが出來た。それが居士が歿してからは私は何物にも頼るところを失つてしまつた。自分のいゝと思ふことを、甲の友人は悪いと言つた。乙の友人はいゝと言つた。丙の友人は又悪いと言つた。さうしてそれ等の人は皆、子規居士が會て私に下したのと同じやうな言葉を、同じやうな權威をもつて、又私に下さうとした。私はそれに満足することが出來なかつた。安心することも出來なかつた。今は心に曇りがある位を優しい程度のものでなく、どうかしなければ、行手がわからぬほどの暗闇となつてしまつた。私の心は淋しかつた、悲しかつた。さうして後を振り返つて見ると、數限りもないほどの澤山の若い人がゐた。その時、私の心の中にかう囁くものがあつた。

「自分を信ぜよ。それが正しくあるかないかは考へる暇がない。唯自分を信ぜよ。其



外に道がないのである。」と。此囁きが私におぼろげながら一つの道を示して呉れた。さうして私は覺束ないながらも、その方向に歩いて行つた。確かに道はその一條ほか無かつた。さうしてだん／＼歩いて行くに従つて、

「此道は正しい道である、少くとも私にとつて……」と、自分で答へた。

斯くして私は自分の後について來てゐる多くの若い人にも、

「こちらへいらつしやい。此所に私の歩いてゐる道があります。」といふやうになつた。それが私の現状である。さうして私は多くの若い人に取り囲まれて寫眞にうつゝてゐるのである。然しながら私の心は斯うつぶやく、

「私の一番樂しかつた時は、子規居士の蔭について歩き、子規居士がいゝと言つたのをいゝと信じ、悪いといつたのを悪いと信じた時であつた。寫眞の中の幸福なる若い諸君よ、その頃の私の年齢は丁度諸君位であつたのである。今私の話す心持は十分よく諸君に汲みとらるゝであらう。」

寫眞の中の若い人は皆黙つてじつとして居る。それに取り囲まれてゐる一人の稍々年取つた男の脊中には、他の人々の眼には見えぬ重い荷物が載つかつて居る。

廊下を通つて便所に行くものが、私の眼をあげてゐることを知つたのでガラ／＼と兩戸代りの硝子障子を開け始めた。それは下に車がついて居るので調子の高い騒々しい音がする。

「いよく／＼起きねばならぬ。」とさう思つて私は蒲團から出た。障子を見ると嚮きに私に打ち晴れた朝の力を吹き込んだ焔の渦はもう消えて無くなつてゐた。私は非常にくたびれてゐるやうに思はれた。寢衣を脱いでシャツに手を通すのも面倒なやうな心持がした。私はシャツの上に襦袢と胴着とを着て、その上に厚いどたらを着た。それから机の上にある手拭をとつて先づ便所に行つて、それから顔を洗ひに流しに行つた。流しに吐いた白い齒磨粉の唾は、流しの板のさ／＼くれに引つか／＼つて容易に流れなかつた。今朝も少し鼻血が出た。これは珍らしい事では無い。殊に鼻血は出るだけ頭が

軽くなるやうに覺えるので私は氣にもかけない。顔を洗つてしまつてからそこにかゝつて居る柱鏡に顔を映して見ると、頭の髪は延びて此頃鼻の上に出來始めた皮膚病は少し擴がつてゐるやうであつた。それから左の臉の方が、右よりもより多く窪んでゐるのが氣持が悪かつた。けれどもさういふ考は柱鏡の前を去るともう無くなつてゐた。それから膳の前に坐つて新聞を見乍ら朝飯を食つた。飯が硬い時ほど箸を持つたまゝ新聞を取り上げて讀む時間が長くなるのであるが、今朝はそれほどではなかつた。食後更に新聞の見残しを見てしまつてから、私は座敷の机の前に戻つた。

机の上には種々雑多の未了事件が堆積されてあつた。未了事件といふのは言ふ迄もなくせなければならぬ仕事がとゞこほつたまゝで机の上に残つてゐるのである。私はそれを前に置いて袂の巻煙草入れの中から巻煙草を一本抜き出して火をつけて口へ持つて行つた。私は元來煙草は好きではないのである。この巻煙草入れに這入つてゐる煙草も何時入れた煙草の残りか忘れてしまつた。十日か十四五日も前に入れた二十本

の巻煙草がまだ五六本も残つてゐるのである。私はその好きでない煙草を口へ持つて行つて徐ろに煙を吸ひ込んだ。さうして呑み込むことをしないで直ぐそのまゝ空中に吐き出した。先刻寢床の中で見た天井や長押を又一度見廻はした。日が上るに従つてそれ等の色は却つて暗かつた。私はいつでもこのホト、ギス發行所を大工の工場だと言つて、來客などのあつた時分には、その待遇の出來ない言ひ譯にするのであつた。言ひ譯ばかりではなく、事實私は此處を大工の工場同様に心得てゐた。

「さあいよいよ仕事にかゝらねばならぬ。」と考へた私の眼には、それ等の天井や長押の色は光澤も裝飾もない、たゞ一色の古びた木にうつゝた。私は一本の巻煙草を辛うじて吸ひ終つた。それから机に凭れて仕事にかゝつた。

私が仕事から呼びさまされたのは、次兄からの電話のベルの響きであつた。電話口に出て聞いて見るとそれは亡くなつた兄の親戚になる或る家の出來事であつた。その親戚といふのは亡くなつた兄に、兄の財産にしては尠なからぬ損失をかけて自分も破

産してしまつた揚句、東京に移住して漸く其日を過してゐたのであるが、それがどうかしたことで横領罪にとはれて未決囚に這入つたといふ話であつた。次兄の電話によると、どうかした理由でこゝに僅かに八拾圓さへあればその窮厄のうちの或る一つの苦痛だけは逃れることが出来るのであるから、工面がつくとなら次兄のうちか私のうちかで融通して呉れるとは出来まいか、といふのであつた。そこで次兄はつけ加へて、「亡くなつた兄さんなり、又われ等にしたところで、恨こそあれ少しも義務があるわけではないのだから、擲つておいてもいゝのだけれど、國にゐる嫂めかけさんの姻戚であることから考へて見ると嫂さんに對して餘り冷淡にすることも出来ないやうな心持がある。お前の意見はどうか。」といつた。私は暫く考へて後、それに對して斯う答へた。「お話のやうな情實も無いことはないけれど、あしの考では、兄さんが存生さんじやうであつたらさういふ話には頭から耳を傾けられないであらうと思ふ。八拾圓といふ金は些細な額であるともいへるけれど、然し兄さんの遺産の中からそれを引出すものと考へて見

ると、それは非常な多額の金ともいへるのである。兄さんに損失をかけて生前に大苦痛を與へた家の窮厄を救ふのに、兄さんにしては大枚八拾圓の金を出すといふことは何だかしのびないやうな心持がする。拒絶してはどうであらう。」と言つた。この亡くなつた兄は東京へ来るのにも必ず三等の通し汽車で来て、帽子も外套も十年以前のものもを被つてゐるほど身をつめて儉約をした男であつた。八拾圓で人の窮厄の一部が救へるとなれば大變安い金のやうに思へるけれども、そんな風に切りつめて作り得た僅かの遺産の中では非常な大金といはねばならぬ。さういふ理由で私は次兄の話に對して反對したのであつた。亡くなつた兄には子供が無かつたので私の次男が養嗣子となつて居る。従つて私が後見といふわけになつて遺産を管理して居る次第であるから、次兄は私に相談したのであつた、涙もろい次兄はよく人の世話をして人から泣きつかれるとそれに対して必ず應分の力を盡すのが常である。私の性質はどういふものだからとそれと反對で、餘り廣く人の世話もせねば、人から泣きつかれた場合にも、それを撥

ねつけることが多い。此場合にも私は次兄の言葉に反抗してそれを拒絶するといふことに一種の痛快さを覚えるのであつた。これはどういふわけであらうか、私はさういふ残忍性を先天的に持つてゐるのであらうか、と自ら振り返つて考へて見ることも屢々なのである。その時の心持を言つて見ると、恰も自分の皮膚の上に出來た腫物をかつかばいて、石炭酸で洗つたやうな心持がするのである。さうしてそれが自分で痛快である許りでなく斷ことわられた方も一層痛快であらう、といふやうな心持があるのである。例へば私が位置をかへて慘酷に拒絶された側に立つたと假定して見ると私はその拒絶した男の冷酷さを憤慨すると同時に、非常にきびくした痛快さを覚えるだらうと想像するのである。私は今どうやらかうやら社會の一員として立つて居る。然しこれが若しどうかしたことで忽ち崖の下に蹴落されてしまつて社會一般から痛罵される時が來たら、丁度悪性の腫物の痒いところを掻きほじくつたやうな氣持の悪い、然し乍ら痛快な心持を味ひ得るであらうと考へる。こんな考を懐くといふことは病的なこと

とかもしれぬ。併しどうかした機會にはよく此の考が飛出して來て、尖つた爪の先きでぢくくした腫物おできの上を掻きむしるやうな快感を味はうのであつた。次兄は、又いつもの弟の癖が出て來たのだと思つたのだらう、其上私の言葉に就いて争ふこともしないで、  
「それでは拒絶することにして置かう。」といつて電話を切つてしまつた。私は又机の前に歸つて來た。

再び仕事にかゝる前に私は暫く空想に耽つて居た。よく世間で積極的に人を苛めたり、陥入れたりしてよろこんでゐるものがある。手近いところで子供にしたところで犬猫を苛めてよろこんでゐるものがある。蟲蟻むしをいぢり殺して痛快がるものもある。斯ういふ残忍性は私には見當らないやうに思はれる。私は蚊とか蚤とかいふものは特別として蟲蟻むしを殺すことは嫌ひだ。蠅でも成るべくは殺したくはない。疊の上を這

つてゐる蟻はどうしてもこれをひねり潰すに忍びない。手の離せない時はその蟻の横  
行を知らぬ風をして擲つて置く。手の空いてゐる時は一々つまんでそれを縁側に捨て  
に行く。そのつまむのも成るべく蟻に危害を加へないやうにやはらかく持つてゆく。  
蛇や芋蟲は非常に嫌ひな方であるがこれを殺すには忍びない、好んでそれ等を殺す人  
の顔を見るとどこかに残忍の影がたゞようてゐるのを見るのを不愉快に思ふ、蟲蟻  
の類でもさうである。況して人間に向つてこちらから積極的に危害を加へてやうと  
いふやうな仕事は私には出来ない。私は、私の過去を振り返つて見て、人を讒言する  
か、方策を設けて人を陥入れるとかしたことは一度もない。第一さういふことをする  
ことは面倒臭い。そんな面倒なことをして勝を占めるよりも寧ろ黙つて負けてゐる方  
が自分に於て痛快だ。私等の友人仲間にも、誰が家を作つたとか、誰が御馳走を食  
つてゐるとか、誰が着物道楽だとか、誰かが權門に媚びるとか、誰が金を溜めるとか  
いつて、人の疝氣を頭痛に病んで騒いでゐるものがある。私はさういふことは嫌ひだ。

人が權門に媚びやうが、家を作らうが、金を溜めやうが、いゝものを食はうが、そん  
なことはどうでもいゝ。第一そんなことをいふのが面倒臭い。考へるのすらも面倒臭  
い。そんなことを考へたり言つたりする暇に黙つて自分の安逸を貪つてゐる方がいく  
らいゝかしのれない。

「さうだ、畢竟無性なのだ。」と始めて自分の残忍性の解決がついたやうな心持がした。  
金を出して人を救つてやるといふことは積極的の慈悲であるが、それをするのが面倒  
臭い。そこでそれをやらないとなると、その結果は残忍といふことになる。さういふ  
残忍には堪へしのぶ力を持つて居る。

「これを要するに自分は無性者なのだ。」

私は再びさう考へた。人から残忍に取扱はれてもそれを世間一般の人ほど苦痛に感  
じないで、却つてそこに一種の快感を感じるだらうといふやうな心持が起るのも矢張  
此無性から來た考かもしれぬ。

その時私は不圖、一人の乞食の顔を想ひ浮べた。それは五十歳ばかりの男の乞食であつたが、それがどうかしたことで印絆纏を着た面相のけはしい或る一人の男に激しく擲られてゐた。その時乞食は少しの抵抗もせず、思ふ存分擲たれながらニヤ／＼と笑つてゐた。やゝ水膨れのやうに膨れた顔に處々深い皺を寄せてにたり／＼と笑つてゐた。私はその顔を何時までたつても忘れることが出来ない。

「あの顔はいゝ顔だつた。」と今も尙ほ時々思ひ出すのであつた。憤怒に満ちた、蒼褪めたけはしい印絆纏の男の顔よりも、この擲られながらニヤ／＼笑つてゐる男の顔の方が遙かに立派な顔に私の眼には映つたのであつた。それからモ一つ思出す顔がある。それは今の大蛇瀉の先代に當る同じく大蛇瀉といつた角力の顔で、それは年寄になつてまだ生きて居るのか、もうとづくに亡くなつたのかその邊は知らないが、兎に角、角力として面貌が醜かつたのと愛嬌がなかつたのとで餘り人氣はなかつた。幕内の可なりなところまで取り進んだけれども、それ以上は昇進もしなかつた。人氣もなく最

負もなく、金もなく策略もなかつたので彼は唯だ自分の力一杯に相撲ふだけのことであつた。土俵に上つても自分の方の聲援はちつともなく、負けると見物がワツとはやしたてゝ笑ふのが常であつた。さういふ時大蛇瀉は鬼のやうな赭黒い顔に白い齒をむき出してニツと笑ひ乍ら歸るのが癖であつた。私はどういふものだから此顔が好きで堪らなかつたのである。もし私に繪が書けたならば是非この顔を寫生して私の全力を籠めた「負けた時の大蛇瀉の顔」といふものを完成したいと考へたこともあつた。衆人の嘲笑の中に、鬼のやうな顔を心持ちつむけて白い齒をむき出しながら歸つて行く老大蛇瀉の顔！私は水膨れの乞食の顔と共に此大蛇瀉の顔を忘れることが出来ない。

「私も一生のうちにあゝいふ顔をして世人の嘲笑の中に立つ時が来ないとも限らぬ。さうしてそれは私の残忍性を痛切に満足さす時である。つまり自分が自分を極端に残忍に取扱つて一種の満足を感じるのである。其時は定めて痒い腫物の上を思ひ切つて搔きむしつたやうな快さを感じることであらう。」

そんな空想に耽つてゐる時に私の眼の前に現はれた一つの顔があつた。それは私のとほつてゐる仕事を催促に來た一つの顔であつた。その人はこゝに待つてゐるか  
らその仕事を仕上げて呉れといった。私は又仕事にかゝつた。

漸く仕事を了へてその人が歸つた時はもう正午であつた。私は餘り減らない腹に午  
飯をつめこんだ。午飯が済むと直ぐ著物を著かへて袴を穿いて甥のたけしと共に表に  
出て逢坂下から西行きの外濠線に乗つた。

寒い日ではあつたけれども、それでもどこかもう春らしい色が堀の堤の松や、家々  
の庭の樹々の梢に見えてゐた。私は電車に乗つてから暫くの間黙りこくつてゐた。た  
けしも黙つてゐた。暫くして電車が本村町あたりを通つてゐる時分にたけしは始めて  
口を開いた。

「何だか國の伯父さんの上京季節が來たやうな氣持がしますね。」

「何故。」と私は訊き返した。

「もうこれからそろ／＼木の芽が吹き出さうといふやうな今頃の時候になると、三四  
月頃になつたら上京をさるかもしれぬといふやうな伯父さんの噂が毎年始まつたでは  
ありませんか。」

たけしは言つた。

「さうだつたね。」と私は答へた。二人は今、今日が亡くなつた兄の百ヶ日に相當する  
ので、兄の墓は國許にあるけれども、われ等の祖父に當る人の骨が納まつてゐる芝西  
の久保の光明寺といふ寺に行つて形ばかりの法養を營む爲め出かけつゝあるのであつ  
た。たけしの考が、春めて來た木々の梢を見るにつけてその亡き伯父の上に及んだ  
のも偶然ではなかつた。二人は又黙つた。

私は高濱家の位牌も——私は池内家から出て高濱の名跡を繼いだのである。——亡  
くなつた國許の兄に托して上京してゐたのである。兄が亡くなつても尙ほその位牌は

嫂が國許で祭つてやるとのことであつたので、私はまだそのまゝにして居る。然しながらだん／＼周囲の事狀が變て私などが家族中の責任者として高濱の位牌はもとより池内家の位牌まで祭らねばならないかもしれないかもしれぬやうな有様になりつゝある。時の流れは音をたてゝ急速に過ぎ去りつゝある。變て私等が墓の中の人となつてしまふと、今度はこゝにゐるだけしや、私の長男である年尾や、兄の名跡を繼がした次男の友次郎などの時代が来るのである。私は不圖昨日會つた一人の娘のことを思ひ出した。私其娘の母を始めて見たのは、その娘よりもつと若い小娘の時であつた。それから久しく遇はないで突然その娘を見た時には私は昔の記憶に残つてゐるその母親とその娘との間に一寸區別をつけることが出来なかつた。年をとつてゐる現在の母親と其娘とをそこに並べて見たならば合點が行くのであらうけれども、その母親にも若い時遇つた切りで遇はないで、その時と同じ位な年頃の娘を目の前に見た時に、私は老い褪めたらうと思ふその母親を哀惜する考よりも、矢張昔の母親と同じやうな若々しい娘が

目の前に現はれ來つたことに向つて一つの満足を感じた。丁度一株の牡丹が去年も立派な花をつけて、それは去年の風雨にいたみ散つてしまつたが、今年も亦同じ花をつけて美しく咲きほこつてゐるのを見るのと同じやうな心持を起すのであつた。今丁度私等の乗つてゐる電車の中にも三組四組の親子づれが乗つてゐた。その中には女の親子もあれば、男の親子もあつた。いづれにしてもじつとその二つの顔を見較べて居ると親の顔にはしほみかゝつた花の衰れさがあつて、子供の顔にはこれから咲かうとする蒼の力が満ちてゐた。盛りを過ぎた花といふのも、これから咲く蒼といふのも、畢竟或る植物の生命のあらはれに過ぎない。個人にとつては生死は大問題であるけれども、大きな人間といふものから見たら、それはたゞ棺にある花の開落に過ぎない。一つの花が散つても、其あとには又別の花が咲くのである。植物其物の生命には何の影響するところもない。

私と二十歳も年齢が違つてゐて、さうして子のなかつた兄は、私を自分の子同様に



思つてみた。その兄が亡くなつて今日が百ヶ日に當るのである。それは梢の花の一輪散つたあとの淋しさを覚えるのである。けれどもそのあとには東京に住まつてゐる次兄もあれば私もある。たけしもあれば年尾もあり友次郎もある。それ等は尙ほ散らずにあり、これから咲く筈である。われ等の花が散つたあとには又その筈が咲き更に別の筈が出来るのである。個人といふことを土臺にして考へると生死程の大問題は又とないわけである。然しながら人類といふ點から考へ來つた生死は誠に些細なことである。

そんな事を考へてゐるうち、又た不圖私の頭に浮んで來た一つの事件があつた、それは二三日前に鎌倉から東京に出て來る汽車の中で私は新聞を読んでゐた。さうすると其新聞の中の記事に、芝口の停留場で新聞の賣子をしてゐた一人の女が自動車に轢き殺されたといふことがあつた。年齢は四十前後の女であつたと書いてあつた。

「あゝあの女だな。」と私は思つた。私はその女から二三度夕刊を買つたこともあつたのである。いつも停留場の南側の人道と車道との間あたりに立つてゐて、男の子の振

りしぼつた聲かと思はるゝやうな聲を張り上げて夕刊を賣つてみた。あの女が轢き殺されたのだな、と私は可哀相に思つた。それから他の記事に眼を移したり、他の書物を読んだりなどして一時間半の後に新橋へ着いた。

それから、いつも乗る芝口の停留場に行つた時に私は最前見た新聞の記事を思ひ出した。此邊であの女はやられたのだな、と思つた。二日前の出來事であつたのではあるが、もしその邊に何かその遭難の形見である血痕でも残つてゐやしないかといふやうな心持がして見廻はして見た。そんなものゝありやう譯がなかつた。然しながら私は、今丁度そこに止まつた電車のポールを箆めかへたり、救助網をつけかへたりしてゐる車掌や運轉手の様子が何時もと少しも變つて居らず、そこに立ち止つて電車の仕度の出来るのを待つて居る一般の乗客、忙しげに往來してゐる街上の人、そこに軒を並べてゐる澤山の店の番頭や小僧や、店頭に入入りしてゐる客や、それ等の人々も餘りにいつもと變らぬ様子をしてゐることが一寸不思議に思はれた。

「こゝには一昨夕、夕刊賣の女が夕刊を賣り乍ら自動車に轢き殺されたといふ一つの出来事があつたのではないか。」と私は叫んでやりたいやうな心持がした。が、次ぎの瞬間に私の心は張りつめた氷が春風に解けたやうに直ぐにやはらいでしまった。

「夕刊賣の女の死、それが何程の價值があるものか。その血にまみれた屍を他へ運び去つてしまつて、路上に流れてゐる血を二三杯のバケツの水で流してさへしまへば、もうその問題は落着いたのである。大きな東京といふ團體の人間の活動の上には毛ほどの痕跡も止めてゐやしない。」

さうして又こんなことを考へた。

「夕刊賣どころか、大山公といはるゝ程の人であつても、威儀を正した葬式が済んでしまつたあとは何でもない。これを物にたとへて見ると、際限もなく生ひ繁つてゐる芒野を歩いて行つた一人の人影が終に芒の中に没してしまつて見えなくなつたのと同じことである。猶ほたとへて見ると、砂濱に残した一つの足跡の、大きな波が來て忽

ちあとかたもなくなつてしまつたのも同じことである。人生の大きな波は、夕刊賣の死も大山公の死も殆んど同じやうに取扱つて、痕跡をも止めずにたゞゆたり／＼とうつてゐるのである。」

その時のそんな考へを私は電車の中で思ひ出したのであつた。そのうち虎の門に來て札の辻行きに乗りかへて私はたけしと共に神明町で下車した。

「たけし、菓子を買つて行かうか、それとも寺で買つて貰はうか。」と私は相談した。

「此前はどうかやらでしたねえ。」

「此前は買つて來なかつたので寺で買つて貰つて、その代り菓子料として壹圓ばかり包んで置いたやうに思ふ。矢張りその方がお寺の收入になつていゝわけかな。」

「さうですねえ。」とたけしはつまらぬことを決しかねてゐる私の顔を見て氣のない返事をした。今私の頭の中には生死問題もなければ、兄の冥福を祈るといふやうな殊勝な考もなく、菓子は買つて行つた方が得か、それともお寺に買はした方が都合がいゝ

か、その些細な問題にばかり思ひ悩んでゐるのであつた。その時たけしは、

「兎も角も買つて行きませうか。」と力強い聲で言つた。

「それではさうして貰はう。」といつて私は財布から五十錢銀貨を出した。「これだけあつたらよからう。」

「こんなにいるものですか、三十錢で澤山です。」とさういつてたけしはもう二三足歩きかけた。

「どこまで行くの。」

「直ぐその四辻よっじのところに、壺屋といふ菓子屋があります。」

たけしは芝の榮町に二三年間居たことがあるので此邊の地理には明るかつた。光明寺の門前で別れてたけしはもうぐんぐん四辻の方へ歩いて行つた。

「豊圓の菓子料が三十錢で濟んだとすれば餘程安く濟んだわけである。」といふそんな胸算用をしながら私はお寺へ這入つて行つた。庫裡の玄關で案内を乞ふともう五十を

大分越したと思はるゝ婦人が現はれた。此婦人は先住の妻君で、始めて私が此婦人の顔を見た頃にもう先住は亡くなつてゐたのである。さうして極めて身體の弱い小さい子供が一人あつた。私の三番目の兄が亡くなつた時にも此寺で經を讀んで貰つたのであつたが、その時にその纖弱せんじやくい小僧さんが綠色の衣に紫の袈裟を掛けて須彌壇の前の一段高いところで力のない聲で經を讀むと、墨の衣をつけた巖丈な一人の役僧が大きな聲でその下の方に坐つて經を讀んだ。その頃は此婦人もまだ四十代の若後家さんであつたのであるが、あの時分に較べると著しく年をとつて衰へが見えた。それもその筈である、その纖弱せんじやくかつた小僧さんはいつか亡くなつてしまつたさうで、現在の住職は最近に他から養子に來たものである。實子を亡くした悲嘆は此婦人を人一倍老い朽ちしめたものであらう。けれども此老婦人はその容貌の衰へたのと反對にハキ／＼した調子で斯う言つた。

「もうちゃんと用意がしてございますから、お上りください。」

そこで私は本堂の横の広い座敷へ通つた。そこには座蒲團が敷き並べてあつて三つばかりの火鉢には火が這入つてゐた。私は一人そこに坐つて、たけし初め他の人々の來るのを待ち受けた。

たけしが來たのは間もないことであつた。新聞にくるんだ竹の皮包を開けると、胡麻や、黄粉や、餛飩子やでくるんだ、團子ともつかず餅菓子ともつかないやうなものが現はれた。

「これは旨さうだ。」と言つて私は既に一つをつまゝうと思つたが、或は之を佛前に供へるやうな話になるかも知れぬと思つたのでやめにした。そこへ一人の女中が茶を汲んで來たので、盆の借用を申込むと、聽て古びた三寶のやうなものを持つて來た。竹の皮包みはその上に乗せた。そこへやつた來たのは澄子であつた。

澄子といふのは亡くなつた三兄の長女であつて、もう一人の子持ちである。母親が

多忙で來られないので自分はその代理旁々來たといつた。澄子は結婚から妊娠、出産といふやうな段取りになつて、一度開業して居つたのを暫く止めてゐたのであるが、今度また芝の白金三光町の方に開業したのであつた。今度の開業に就いて、

「大分子供の手もはぶけるやうになつたし、それに佛蘭西の方へもいつ行けるか分りませんから又開業でもして見ようと思ひます。」といつたのは、此前會つた時の話であつた。此澄子は頭のいゝ方であつて、十九の年に女醫の試験が出來て一人前の人間になつたのであつたが、何にせよ女のことであるから華々しく開業して男の醫者達と競争を試むるやうなことは出來なかつた。その母親が二十年間奮闘して來た下宿屋の表の二間を改造してそこを診察所にして、軒に赤い硝子の球の電燈を出して主として小兒科を専門とする看板をかけた。はかくしい結果も得られなかつたけれども、格別資本もかゝらない仕事であつたので、それを永續して行かうと思へば行けぬこともなかつた。たゞこゝに結婚問題が起つて來たことが多少の波瀾を引き起した。それは或

る一人の男から結婚を申込んで来た。澄子は初めは自分の仕事のことを思つて容易くそれに應ずる氣はなかつたけれども、女の腕一つで女醫として立つて行く上に多少の不安を感じ始めた彼女は、熟慮の末漸くその耳を結婚問題に傾けるやうになつた。澄子はその一伍一什を私に話してどうしたらいいものだらうかといつた。私は女醫として立つて行かうといふ當初の考をさう容易く變更することを好まなかつた。澄子はその考を決しかねてゐたやうであつたが、先方の申込の熱心なのに動かされて終に女醫の職を抛つて人妻として立たうといふことに其決心を堅めてしまつた。母親も私も澄子の考が定まつた以上は強ひてそれに反對しようとも思はなかつたが、困つたのは今日の佛であるところの國の長兄であつた。初め澄子がまだ女學校に行つてゐる頃、種種の家庭の事情から母を行く／＼見なければならぬ責任は、自然澄子の上に歸するものであるから、女としても一家を支持するに足る丈の職業を選ばなければならぬ。それには女醫がいゝと思ふがどうか、といふことを熱心に説いたのは國の兄であつた。

一度び其責任の地位に立つた以上、家の爲めにはどんなことでもしなければならぬと考へてゐる兄は——現にそれを實行して来た兄は——澄子が、長兄の家から分家して別に一家を成した三兄の家を支持して行く爲めには、如何なる犠牲をも拂はねばならぬといふ考からその女醫説を力説したのであつた。もと／＼冷やかに物を考量する理智の勝つた澄子は、自分でもその責任を感じてゐたらしく、何度も大きく首肯うなづいてその兄の説を容れたのであつた。さうして彼女が女醫學校に席を置いて、僅かの年月の間に人一倍の勉強をして、數へ年十九の年に前期後期はもとより實地試験までにも及第して女醫の資格を贏ち得たといふことは國の兄の驚きでもあり悦びでもあつた。其爲め澄子の開業問題が起つた時も、私などは冷淡な叔父としてそれほど幫助を與へたわけでもなかつたが、長兄は其費用の多くの部分であるところの二百五拾圓ばかりの金を送つて来て心から助力をしたのであつた。——尤も兄の方針として其金には利子をつけて、さうしてその利子はとゞこほりなく仕拂ふことを澄子に嚴命した。これは

私が始めて三百圓の金を兄から借りてホト、ギスを始めた時も同様であつた。一家の經濟を支持する上に於てあらゆる苦心を嘗めて來た兄は、家族の者の事業を援ける場合に必ず此方法をとつたのであつた。——さうして澄子もまた、他のことはさて措いてもこの伯父に送るべき利子はちゃん／＼と仕拂つてゐた。其頃兄の澄子に對する同情と信用とは加はるばかりであつた。ところが意外にも、その澄子が當初の意志を翻へして折角今迄築き上げて來た女醫の職業を抛つて人妻とならうと決心したといふことを聞いた時には兄は非常なる落膽と憤怒を感じた。その頃兄は恰も上京してホトトギス發行所に滞在して居つたのであるが、私が北陸地方を旅行してゐた留守中に其事を聞いたのであつた。そこで兄は非常なる失望と悲しみとに満ちた心を推し鎮めながら私の歸京を一日千秋の念おもひで待つてゐた。私が豫定よりも一二日遅れて歸つて來たのを見はやく、疲勞した顔に喜びの色をたゞへて迎へて呉れた。——其頃兄はホトトギス發行所の建物が修復を要するので、自分で大工を監督して毎日働いてゐて呉れたので

あつた。平常から壯健でなかつた兄は、その爲め非常に疲勞を感じてゐたやうであつた。——さうしてほかの話よりも先づ第一に澄子の話を持出した。

「あしは兎に角不賛成であるが、然しお前の意見を聞いた上でゆる／＼相談もし、決定もしようと思つて待つてゐたのだ。お前はどう思ふ。」と言つて私の顔を見つめた。實は私も早くから此事を兄に話さねばならぬと思つてゐたのだが、成るべく旨く切り出さうと思つて一日々々と遷延してゐたのであつた。實は私と次兄とは内々相談をして、「當人の考が結婚に傾いた以上、強ひて他から壓迫してそれを遮るといふことも出来ないから、われ等二人のうちで旨く兄さんに話して何とか處置をつけねばなるまい。」など、話したこともあつたのであつた。そこで私は意を決して、わざと軽い無造作な調子で斯う答へた。

「當人がさういふ意志になつた以上、それにまかせてはどうかな。どちらが幸福になるか不幸になるか、それは一生經つて見ねばわからない。先方も懇望してゐる様子で

あるから、先づ良縁として兄さんも賛成しておやりてはどうかかな。」

其私の言葉を聞いた兄は心の底から湧き立つて来る怒りを抑へた様な笑ひ様をして「お前の意見はさういふ意見か、大方そんなことを言ふであらうと思うてゐた。兎に角中兄さんところへ行かう。さうして三人で協議しよう。」

さう言つて兄は最早他のことは一言も言はずに、其中に日用品を入れてゐる一つの旅行鞆を提げて先きに立つて表へ出た。そんな大きな鞆を提げて行かなくつてもよからうと思つたのであつたが、私はそれを止めもしなかつた。さうして自分でそれを持たうと言つて私の手に受取つた。飯田橋までも電車に乗つた方が樂であると思つたけれども、とても兄は賛成するわけはないと思つて、私は平常餘り持つたことのないほどの重さのある鞆を持つて、兄のあとについて歩いた。

江戸川の家には次兄が折よく在宅してゐた。三人が向き合つて坐つた時に、兄は漸く口を開いた。

「澄の問題だが、あしは不賛成だといふし、清は賛成だといふ。お前の意見は何うか。」

三人で協議をしようと思つてやつて来た。」

さういつて兄は熱心に次兄の顔を見た。次兄は私程は無造作には話さなかつた。けれども結局兄さんもそれをお許しになつた方がよからうといふ意味のことを説いた。それを聞いてゐる兄はだん／＼と激して来る様子であつた。

「さうか、お前もさういふ意見か。然しお前等二人がいくら賛成してもあしはどこまでも不賛成だ。本家の池内としてそれは許さない。あしが許さないのになほ澄子の考が結婚の方に傾くやうであつたら、あしは承知しない。さういふ我儘な考は池内家の家憲にそむくものである。あしは澄子と刺し違へて死ぬる。」

さう言つて起ち上つた兄は、また最前の大きな鞆を提げて一人で玄關に出て行つた。「お歸りになるのなら一緒に歸らう。鞆はあしが持たう。」といつて私はあとから起つて行つたが、兄は、

「いゝお前はあとへ残つた方がえゝ。あしは先きへ一人で歸る。」

さういつて兄は靴を提げたまゝ先へ歸つてしまつた。私と次兄とはあとで、

「困つたものだが、兎に角われ等二人でどうか始末をつけねばならぬ。兄さんの一刻にも閉口する」

さういつて二人は淋しく笑つた。

此問題は其後兄が國に歸つて後、二三度手紙の往復をしたり、又私が國に歸つた時、今度は態度を改めて極めて慎重に評議をして私に一任して貰ふことにして漸く落着いた。澄子は結婚して一ヶ月も経たぬ間に良人は里昂の領事館に赴任した。間もなく一人の子の母となつた澄子は良人のあとを追うて佛國に渡る筈であつたのだが、戦争の爲めそれも果たさずに今日に到つたのである。良人の旅先から送つて來た金で澄子は一番に開業當時の兄に對する負債を償却した。これは兄が澄子の結婚を默認する條件の一つであつたのである。

私は再開業の澄子に始めて對面してそれ等の過去のことを思ひ出すともなく思ひ出しながら暫く黙つてゐた。さうして大分子供にも手がぬけるやうにもなり、佛蘭西の夫のそばに行くことも當分絶望といふことに決まつてから、又心が仕事の方に向いて開業して見る氣になつたといふ澄子の心持に十分同情することが出來た。さうして私が見る舊式の思想にも或點まで同情することが出來、澄子の近代的の考にも或點まで理解を持つてゐるといふことが兩者の間を調停する或る役目を働き得たといふ自信もないではなかつたが、又一方から言ふと、それにも同情し、これをも理解するといふ不判明な態度にあつたが爲めに、徒らに事件を紛糾さしたといふ責をも一身に負はなければならぬ、といふやうな慙愧の念も起らぬではなかつた。澄子は多くの甥や姪の中にあつて、就中自分で自分の道を開拓して行かうといふ傾向を持つて居る。其爲めに自ら波瀾の多い生涯を送るやうになるかもしれぬ。少くとも二人の妹などよりは、自分で責任を感じ苦痛を脊負はねばならぬ立場に立つことが多いかもしれぬ。彼女の



年齢ももう二十八歳に達したのである。たけしもそれに一歳上の二十九歳で、これももう明日のうちにも一人の子の父となるべき運命のもとにある。世の中は回轉して居る。もう長兄の時代は消えてなくなつて、それは一個の佛となつて今日此寺で亡きあとを弔はるゝのである。最早私如き年齢のものが、一家の長老株の一人として是等甥や姪の上に蒞まねばならぬ時代が來てゐるのである。われ等が長老顔するといふことも或る意味に於ては既に時代をたけしや澄子の若いものに譲りつゝあるのである。私はたけしや澄子の顔を暫く見つめてゐた後に、

「世の中は瞬またく間に變つて行くよ。もう直ぐお前等の時代が來るのだ。」と言つた。たけしは自分に言つた言葉ではあるまいと言つたやうな顔つきをしてよそ見をしてゐた。澄子は氣の乗らんやうな聲をして、

「さうですかねえ。」と答へた。

そこへ姿を現はしたのは次兄と次嫂とであつた。私は早速次兄に相談した。

「お布施はいくらでよからう。貳圓くるんで來て居るのだが、それでよからうか。菓子菓子は自分の方で買つたのだが……」と言つた。

「よからう〜。」と次兄は軽く首肯いた。「菓子があるのならそれを佛前に供へて貰はうではないか。此前の法事の時に佛前に餘り菓子らしいものが無かつた。寺から供へた菓子だけが一つお華か足そくに載つてゐたばかりで、寺からわれ〜の席へ出した菓子は別に供へてなかつた。今日も佛前には寺から何か供へたらう、聞いて見ようか。」と私は應へた。そこへ住職が姿を現はしたので聞いて見たら、佛前にはもう供へてあると答へた。そこで最前たけしの買つて來た三寶に載かつてゐた竹の皮包みは始めて自由にわれ〜の手を觸れ得るものとなつた。私も食へば次兄も食つた。

「旨いから食つてごらんさい。お前等も食つてごらん。」と私は嫂や甥姪に勧めた。皆食つて見て旨いと言つた。数が三十あつて一つが一錢だとするとこれは普通の餅菓子などより旨いといふことに評議が一決した。住職の前には私の出した貳圓のお布施

の外に、次兄や、澄子や、澄子の母親からや、遅れて来た鶴子——これは澄子の妹で父親が死んで後國の長兄の手許に引取られて養育され、其養女として他に縁附いたものである。——などからのお布施も、それ〴〵別の紙にくるまれて住職の前に並べられた。住職はそれをおし頂いて受けて、

「もうお揃ひになりましたら讀經にかゝりませう。」といつて先きに立つた。われ等は皆本堂の方へ行つた。

この本堂といふのは、一度び火事で焼けたあとに建築したもので、火事を防ぐために表は藏作りのやうになつてゐる。中に這入つて見まはした時の感じをいふと、木柱などから受ける白々とした新しい粗末な感じに較べて、須彌壇のやゝ古びた金泥の色が際立つて立派に見える。火事の時に取り出した須彌壇をこゝに再び安置したものであらう。住職は一段高いところに坐り、役僧は低いところに坐つて讀經する具合はい

つもと變りはない。開扉されてゐる本尊の前には、寶池院慈光忠誠居士といふ亡き兄の戒名の胡粉で書かれた位牌が置かれてある。天井からは、天蓋の瓔珞が下り、柱には旛幢の綾がかけられ、香煙は縷々としてその邊をたゞよつてゐる。その中に兄の位牌は寂寞としてわれ等に面して立つてゐるのである。私のそばに坐つてゐる次嫂は、時々僧の聲に合はして南無阿彌陀佛々々々々と六字の名號を稱へる。私の心も何となく落着いた心持になる。阿彌陀經は子供の頃から法事の度々に聞いた經文であるだけに其文句が耳なれてゐる。それからその經の讀みやうの巧拙によつてわれ等もうける感じが大變違ふことなどを考へる。上壇の住職の方のは腹力の足りない聲で聞いてゐて心細い。下の役僧の方のは音量もあり腹力もあるが、調子が粗野でいゝ心持がしない。兩君共少し諳ひでも諳つて聲の習練をしたらよからうと考へる。ふと先刻問題であつた菓子はどうであるかと思つて見ると、餘り色彩のない菓子が左右二つの華足けそくに盛つてあるほか格別の供へ物もない。南天なんてんの實みに白梅をあしらつた花が其左右

に突立つてゐる。本尊の阿彌陀如來の顔は悪い顔ではない。亡くなつた兄は此阿彌陀様の御手に救はれたことになつてゐるのだと思つてじつと考へて見る。われ等の生は樹頭の一輪の花の如きものとすればそれは根柢にひそんである大きな生活力の一つの幻滅に過ぎない。その生活力の根柢をどこまでも底へくと押しつめて行つたところに阿彌陀様といふものが想像される。印度思想は研究して見たら面白いものだらう、と思ふ。耳もとには次嫂の南無阿彌陀佛、々々々々々といふ聲が又聞こえる。不圖正面の左手にある大きな丸柱にぶら下つてゐる一枚の板が眼につく、それにはこんな意味のことが書いてある。

「この本堂は檀家各位の援助のもとに再建することが出来たけれども、其當時竣工を急いだ爲めに、多少手落ちのところがあつて雨漏りがして困る。一日も早く手入れをしないと取返しのかぬことになるかもしれぬ。檀家諸君の再度の援助を待つ。」とさういふやうな意味のことであつた。私は須彌壇に較べて比較的粗末に見えるその建築

を再び見廻はした。それからその雨漏りを直す爲めに、もうどれ位淨財が集まつたらうかなぞと考へた。讀經の聲が再び耳に這入つてその考は直ぐ消え去つてしまつた。寶池院慈光忠誠居士の戒名は退屈さうに香煙の中に突つ立つてゐた。私の考は又兄の生前のことに飛んで行つた。

澄子の結婚問題の時に兄が東京に来てホトトギス發行所に寝泊りしてゐたのは次ぎのやうな譯合わけあひからであつた。それは船河原町のホトトギス發行所は千二三百圓の金を出して亡くなつた兄が私の爲めに買つてくれたものであつた。私は一時兄に五六千圓の金をあづけて置いたことがあつたが、其後ホトトギスの經營が困難になつた爲めにだん／＼送金してもらつて二三千圓に減つてしまつた。けれども兎に角それだけの金はまだあつたのだから、その家は自分で買ふことにしてもいゝのであつたが、どちらにしても同じことだといふので兄の金で買つて呉れて、利子は私の方から仕拂ふことにしたのであつた。ところが自分のものとしてその家を保存して行くのには此際一大

修繕を要する必要があつたので、私は東京の大工に見積らして見た。ところが印絆纏を着て靴を穿いた一人の棟梁が来て見積つた結果によると、どうしても修繕に千圓以上を要することになつた。それを折節上京して来た兄に見せたところが、兄は眉間に深い皺をよせて賛成しなかつた。

「修覆に千圓もかけては堪らんぞい。然し雨漏りもするし、ところ／＼根太も腐つてゐるといふやうな有様であるから、今のうち大修繕をする必要はある。」と言つて沈思黙考してゐたが、

「一つこれはあしに任かさないかい。何とかして見よう。」とさう言つた。私は萬事を兄に委任して北陸の方の旅に出たのであつた。それから兄は自ら或る大工と話し合ひをして、木材なども自分で見立て、買つたり、又自分で大工と共に床ゆかの下したへも這入り、屋根にも上つたりして、病弱であつた身體に不相應な努力をして終に五百何圓といふ、曾て私の見積らした大工の見積りの殆んど半額でその修繕を仕上げて呉れたのであつ

た。私が旅から歸つて来て澄子の話をした時などは一見して疲勞してゐる様子が見えた。兄は澄子のことには满腔の不平を懐いたのであつたが、自分の努力で家の修覆を見積りよりも半額の金で仕終せたことには満足を感じたのであつた。

それから兄はその時に或一つの相談をわれ等兄弟に持つて上京したのであつた。それは、だん／＼自分も年を取つて来て友人は大方死んでしまふし、老夫婦ぎりで子供もなく寂寥を感じるから、弟二人や甥姪も澤山ゐるし、殊に自分の養嗣子となるべき友次郎もゐることであるから、東京か鎌倉に移住をして見ようかといふさういふ相談であつた。私が始めて兄を新橋の停車場に迎へた日、兄はそのことに就いて一寸口を切つた。私は、

「さあ、それもいゝだらう、ゆつくり御相談をしよう。」といつてその時の話はそれきりになつてしまつた。それから兄はしみ／＼とその事を相談する機会を待ち受けてゐるらしかつたが、私も次兄も其日々々の仕事に追はれて一向しみ／＼と話をする機会が

なかつた。表に出れば電車が目まぐるしく走つてゐるし、内に居れば電話のベルが八釜しく鳴つて来るし、國許のしづかな家に老夫婦がその日／＼を退屈なやうな静かな月日の中に暮してゐるのは餘りに烈しい變化であることが、どうも兄の心持と調和しなかつた。そのみならず見たり聞いたりする家族仲間の種々の出来事も氣に入らぬ方のことが多かつた。さうしてしみ／＼話をする機会もないうちに一人の弟は旅に發つてしまつた。さうして苦しいうるさい家の修覆を一人で引受けてやつたことに就いても其の弟はそれほどの注意も感謝も拂つてゐないやうな様子に見えた。その事務所に於ける弟の行動、事務員等の立振舞、其他一體の空氣は、兄の心持とはそぐはぬものであつた。又それ等の都度兄の眉間に刻まるゝ深い皺は私の神経を根強く刺戟した。「こんな調子で兄が東京に移住して來たらどんなことになるであらう。第一兄自身の不愉快で居たゝまらなくなりはないだらうか。いくら友人が乏しくなつて來たといつても、それでも尙ほ火鉢を抱へて一日を悠々と語り暮す相手は田舎ならばある。東

京には恐らくさういふ相手は見出されぬであらう。兄は下掛り實生の謠を人に教へることをも老後の樂みの一つにしてゐるのであるが、それも松山なればこそ、兄の氣分に逆らはぬやうに習ひに來る弟子があるのであるが、東京には一人もあるまい。老後の寂寞を慰める爲めに東京に來た結果、寂寞を慰めるどころか、却つて其日々々を不満に暮すやうになつてしまつては仕方がない。」

さういふ考を私は抱くやうになつてゐたのであつたが、澄子の一件が起つてからいよいよ、

「これでは困つたものだ。」と私は兄の移住に不賛成のことに決心した。次兄も凡そ似寄つた考を持つてゐるやうであつた。

「今度の滞在は家の修覆の爲めに大分長くなつた。もう歸ることにしよう。」と言つて兄は或日突然旅装をとゝのへた。其時東京移住の話が又兄と私との間の話題になつた。私は私の考を或點まで率直に話した。さうして。

「結局その日／＼見るもの聞くものが悉く不愉快の種になつてしまつてもつまらぬとそこを心配するのだ。」と私は言つた。

「そんなことはない。東京へ来れば又それなりの心持になる。」と言つて兄は痛みを帯びたやうな笑ひをしながら、「然しお前がさういふ意見なら尙ほよく考へて見よう。急ぐことでもない。」

その以上兄はもう其ことについては言はなかつた。さうして例の大きな旅行鞆を提げて新橋を發つた姿は物淋しかつた。それ以來兄は再び移住のとは口に出さなかつた。私はそんなことを思ひ出しながら戒名の胡粉の文字に眼をそゞいでゐた。

「時の流れは總てのものを洗ひ去つてしまふ。それ等のことは皆んな過去の思ひ出になつてしまつた。たゞ兄の努力によつて修覆された事務所の家だけが残つて居る。此家と私との關係も行く／＼はどうなることか、私等が又時の波にさらはれてしまつたあとには何物が残るか。」

急に騒々しく南無阿彌陀佛の聲が聞え始めたと思つたら、それはもう阿彌陀經が濟んでしまつて、住職の口からも役僧の口からも六字の名號が幾度びとなく繰返され、

私の隣にゐる次嫂の口からも、同じく繰返されつゝあるのであつた。それから住職は斜めにわれ等の方を向いて坐り直したので、又お説教が始まるのかなと思つてゐたら、今日はお説教は抜きにして例の御文章ごぶんしょうを読むのであつた。今日は白骨はくこつの御文ごぶんでなくつて何か他のものであつた。あれは読みやうが旨いと人の心をしんみりさせるものであるが、旨いといふ方ではなかつた。此住職はまだ三十歳前後の瘦せ形の美男僧であつて、物を言ふ時にも直ぐ顔を赤らめるやうな優しげなお僧だが、始めて兄の法事をホトトギス發行所で修した時分に、讀經が濟んで後斜めにわれ等の方に座を構へて徐ろに口を開いたのは、人間は心を正しく持たねばならぬといふやうな家庭講話のやうなものであつた。私はおや／＼と思ひながら聞いてゐた。今日も亦須彌壇下から同じやうな講話が始まるのではないかと思つたら始まらなかつた。

一同が焼香をして兄の位牌に禮拜することが済んでから又嚮きの控へ室に戻つた。そこでは雑談が取り交はされた。住職も出て来て次兄と碁の話などをしてゐた。一同が表に出て電車に乗つて散り／＼に分れたのは二時を過ぎてゐた。

私は一人御成門から本郷白山行きの電車に乗り替へて高等學校前の停留場で下りて根津の権現社内の娛樂園といふ貸席で催さるゝ俳句會に列席した。二三十人の大學關係者が集まつて句を作るのであつた。模範藥局に出て居る藥劑士も居れば、法科の學生もあり、醫科の學生もあり、文科の學生もあつた。多くは制服のまゝ大學の放課後、直ぐこゝに集まつて來たものであつた。私は自分が高等學校の制服をつけてゐた時分のことが思ひ出された。京都の吉田がまだ今のやうに盛んになるずつと前のことで、たゞ煉瓦の建物が二棟か三棟あるばかりの教室を取圍んだ百姓家や、吉田神社の神主の家などに學生は皆下宿してゐたのであつたが、われ等は何かの會合があるといふと

制服のまゝでノートやインキを携へたまゝでよくその會合に出かけた。さうして盛んに菓子を食べり食つたものであつた。それが同郷人の會合とか、佛教の講話を聴くとか、もしくはクラスの茶話會とかいふ單純なものであつてもわれ等は何となく一種の快感を覺ゆるのであつた。同じ制服を着てゐても堅苦しい教室に這入つて講義を聞くのと、其制服の膝を折つて胡座を掻きながら佛教の講話を聞くのとは大變心持の上に相違があつた。さうしてさういふ席にはその佛經の講話をする年とつた僧侶とか、それが又同郷人會の場合には教師や事務員のうちから出席して貰つた同郷の先輩とか、クラスの會合の場合にでも、そのクラスの監督を受持つてゐる一人の教師とか、混つて必ず年の若い制服を着た生徒以外の年長者を見るのが常であつた。さうしてそれ等の人も多くの若い生徒と一緒にぼり／＼と鹽煎餅を嚼つたり、澁茶を飲んだりするところにも何とも言ひ知れぬ一つの懐しさがあつた。さういふことを思ひ出しながら今の席上に於ける自分の影を振り返つて見ると、私の鬢髪には既に白きものを交へ、青衫

の諸君の中に一人色彩を異にしたものであつた。共に膝を組んで鹽煎餅を嚙つて句作するうちに懐しさもあれば淋しさもある。席上の諸君のどの顔を見ても活氣がある。これからぐんぐん成長して行く春の木の芽の強さがある。自ら振り返つて見る私には秋風を待つ木の葉の淋しさがある。一應句作が終つた頃に一人の寫眞屋がやつて来てこれから撮影するのだといふことであつた。

「おやく又寫眞か。」と思ひながら私は諸君の命ずるまゝに裏の庭に出た。いろ／＼排置してある庭石の一つの上に、私は寫眞師の命ずるまゝに腰をかけた。私の前にしやがむ人もあれば、腰をかける人もあり、後ろに立つ人もあつた。小さい池を隔てた向うに機械を据ゑた寫眞師は、今少し俯向いて下さいとか、もう少しくつついて下さいとか、いろんな註文を持出して可なりな時間が費えた。四ツ目垣を隔てたところは神社の境内で、今日は神社の祭と見えて神樂堂には馬鹿囃子が始まつてゐて大勢の人がその前に立つてゐた。それから四ツ目垣の外にある稍々大きな池の向岸のところには、

風船屋や甘酒屋などが荷を下ろして、子供や子守をその前に集めてゐた。その子供達はわれ等が寒風にさらされ乍ら寫眞を撮つてゐるのを見て手をたゞいて囃し立てた。その子供の頭の上あたりには赤や青の風船が揚つてゐた。

寫眞を寫してしまつてから部屋に戻つて句の選をしたり讀上げをしたりした。それから又別の題で第二回目の句作をするといふ事であつた。皆少しも疲労した様子がなくつて、晩食の椎茸飯をかぶりつくやうに食つてしまつてから又其句作にかゝるのであつた。私は若い諸君よりも一足先きにそこを出た。

私がホトトギス發行所へ歸つたのは九時頃であつた。寒い十疊の座敷の眞中に延べである床の中に潜り込んだ。温い湯婆の足に觸れるのが心持がよかつた。電氣を消した座敷は天井も、欄間も、長押も、額も皆んな眞暗であつた。(大正六年三月)



# 一 日

下ノ關。

眼が醒めた。西洋風の枕は平べつたいお手玉の大きいやうな四角な袋が二つ重なつてゐるので私には勝手が悪い。その一つの枕を半分に折つてすけて寝たのであつたが、朝になつて見ると矢張り平べつたくなつてしまつてゐる。首筋も、頭のところも扁平でどうも枕らしい心持がしない。これは氣に入らぬけれども、白い布片ちぢでくるんである重みのある厚い毛布を著て寝ることは悪い心持ではない。昨晚寝る時に足の先きが温まらないと困ると思つて足袋を脱いだ素足をしばらくストーヴであぶつてから寢臺の上に這ひ上つたのであつたが、その足の先は夜中温かであつた。連日の汽車のくた

びれを昨夜の一睡で取り返したやうに元氣よく眼が醒めたのである。ストーヴはどんなになつてゐるかと思つて見たら、石炭は灰の塊りになつてしまつてゐて、その底の方に赤い火が少し見えて居るばかりであつた。

「道理で大分部屋が冷えてゐると思つた。」と考へて兎も角も起き上る。寢臺には慣れぬので起き上つたはずみに寢臺のバネのはね上るのに旨く調子がとれぬ。毛布の中から現はれ出でた、薄い浴衣の寢衣を著た細帯姿の私の貧弱な影法師が直ぐ前の鏡に映る。由來西洋人といふものは鏡が好きなものと見えてどのホテルのどの部屋にでも大きな鏡がある。私の此寢衣といふのは、五拾錢均一の、一遍洗濯すると糊が落ちてしまつてべた／＼と身體にくつつく様な格子縞の浴衣である。洗濯した時決して糊をつけないことにして、そのべた／＼した奴を著ることが寢衣として最も肌觸りが好いやうな心持がして、私はうちにゐる時もこれを著るし、旅行の時も鞆の中に押し込んで持ち歩くのである。其貧弱な姿がホテルの部屋には必ず附物になつてゐる大きな鏡にまさ

まさと映つてゐるのを眺め入る。どうも私は身體に比較して顔の方が大き過ぎるやうである。顔に比較して顔の造作の方が大き過ぎるやうである。寢衣姿の、げそつとした兩肩から下が力なく小さいのに較べて、顔が割合に大きく勢ひを得て居る。さうして其顔の大きさと目口鼻の大きさの釣合を眺めて見ると、顔の輪郭よりも道具の方がはびこつてゐるやうな觀がある。不折を初めとして多くの畫家が私の顔中を鼻にしてしまふのは失敬なわけだけれども、満更いはれないことではないと、更に鏡を眺め入る。

馬鹿に靜かだ。ホテルの朝はこれが氣持がいゝ。ばた／＼といふ下女の足音が聞こえたり、隣室の客の鼾の聲が響いたりしないのはホテルの得だ。狭くとも此一室は何人の侵入をも許さない我が城郭である。我が小天地である。我輩の自由が此部屋の内に満ち／＼してゐる。さうして吾輩を見守つてゐるものは只二個の大きな鏡があるばかりだ。といふやうな心持がして何となく氣樂である。

「あゝ寒くなつて来た。」と覺えず私は身震ひをした。もう一度毛布の中にくるまり込まうかとも思つたが、それは止めにしていよく起きることにする。毛布から兩足を抜き出して寢臺からぶら下げる。先刻鏡に映つた貧弱な撫で肩に相當した瘦せ細つた小さい足である。それを二三度ぶらぶらさせて見て寢臺から跳ね下りるやうにする。腰の下で又寢臺のばねが調子悪く一つ躍る。

寢衣を脱いで裸になる。猿股を穿き、シャツに兩手と頭とを突つ込む。眼が漸くシャツから出た時、頭と兩手とが三叉のやうにシャツからはみ出してゐる光景が鏡に映る。その上に、一重ねになつてゐる昨夜脱ぎすてたまゝの著物を著る。綿入れの胴著に、上衣うはぎに下衣したぎに綿入羽織を重ねた姿は、前よりも肩幅を廣くし、身體全體に恰好をつけたので、顔との釣合も先づどうか斯うか取れる。

窓掛を開けて見る。驚いた。表は非常な雪だ。昨夜寝る時は皎々とした明るい月が中天にかゝつてゐたのだが、いつから此雪が降り出したのであらう。往來にも立木に

も三四寸は積つてゐて尙ほ綿のやうな雪が絶間もなく降つてゐる。今年は一體天候が變調で、東京の方面が暖かで關西の方面が寒いといふことであつたが、誠に其通りである。然しいくら寒いといつたところで下ノ關でこんなに雪が降らうとは豫期しないことであつた。車夫や赤帽が集まつて停車場前の雪を今漸く掻き始めたらしい光景であるが、いづれもその手つきが頗る無器用である。殊に柄のついた雪掻がないと見えて、多くは板片れをもつて出てそれで掻いてゐるので中々はかどりさうにもない。それから道を歩いてゐる人も皆高い齒の足駄を穿いたり、普通の短靴を穿いた姿ばかりで、覺束ない足もとで漸く道の眞中に一筋二筋の踏み堅めた黒い跟のついてゐる上を辿つてゐる。どれもこれも雪といふものには餘り慣れてゐないらしい様子である。下ノ關の町は私はまだ散歩もしたことがないので、どの方角にどういふ町があつてどういふ建物があるのか少しも知らないが、此窓から見る左手みぎの方は高臺たかだかになつてゐて、そこの人や杜もりなどが雪をかぶつてゐる景色は悪くない。それから正面しやうめんから右手ひだりの

方にかけては人家の屋根の上に大きな汽船が見える。右手を遠望するに従つて雪の斷れ目の黒いところは水であることが分る。即ちこれが關門海峡で、會つて私が門司からこの下ノ關に渡つた時通つたのも此水、朝鮮に行く時縦斷したのもこの水であつたのだなア、と面白く眺め入る。前の人家の屋根が雪で眞白になつてゐるのと、對岸の門司の方の山々が同じく雪で眞ツ白になつてゐるのにと挟まれて、直ぐ其屋根の上に大きな黒い蒸汽船の浮んでゐるのは目立つた面白い景色である。

「成程斯うやつて見ると黒船だなア。」と感心する。さうしてその黒船が黒い煙を吐きながら、白い雪の屋根の上を左から右へ滑つて行く景色は文樂座ぶんがくざの人形芝居の大道具が動くやうな心持がする。

私は暫くその雪景色に眺め入つてゐたが、早くストーヴを焚かないと部屋の空氣がいよ／＼冷えて来るばかりだと氣がついて窓掛けを閉めた。それから扉ドアの錠に鍵をさし込んでそれを開けてからその扉ドアの横にあるベルを押してボーイを呼んだ。ボーイは

間もなくやつて来て私が命ずるまでもなくストーヴの灰の篩ひ落しにかゝつた。私はその間に便所にも行くし、歸つて来てから齒を磨いたり顔を洗つたりした。さういふことは奈良ホテルで既に一度び經驗してゐるので別にまごつきもしないで悠々と立ち振舞ふ。それから朝の食堂ではオートミールやトーストパンを嚙つたばかりで、ほかの皿には手をつけずに引きあげる。

讀書室などをぶら／＼とぶらついた後で、部屋に歸つて見ると、もうストーヴの掃除は出來上つてゐて、新たに投げ込まれた石炭にはちよろ／＼と火の線が這ひかゝつて漸く火勢を強めやうとしてゐる。私はアームチェアをその傍に引き寄せて両手をストーヴの火の上に翳した。

落着いた靜かな心持である。此前私は或る一人の宣教師と或る船の中で落ち合つて、それから汽車にも一緒しよに乗つて旅中の退屈さに向うの解するだけの日本語で話したことがあつた。その時私は、